福岡市埋蔵文化財調査報告書第518集

那　珂　18

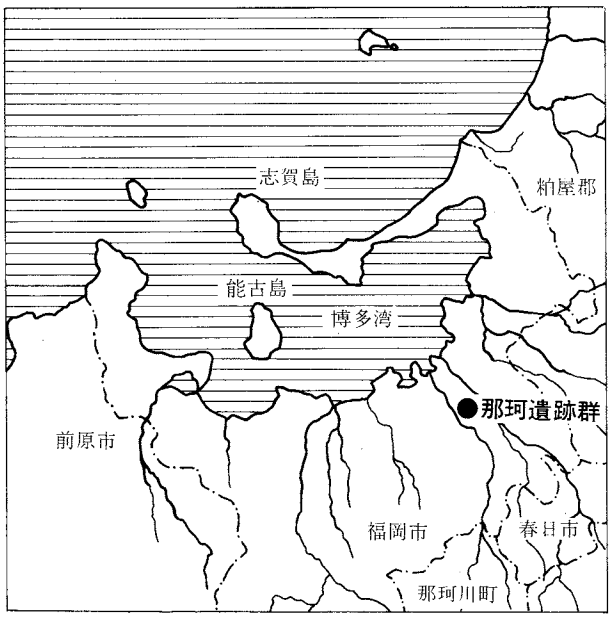
—那珂遺跡群第50次調査の報告—

1997

福岡市教育委員会

福岡市埋蔵文化財調査報告書第518集

那　珂　18



遺跡調査番号　9441
遺　跡　略　号　NAK50

1997

福岡市教育委員会

序

福岡市のほぼ中央部を南東から北西に延びる広大な那珂・比恵台地には先史時代から中世にわたる遺跡群が密度濃く分布しています。都心部に近いこの地域は、各種の開発が活発に行なわれているところです。

福岡市教育委員会では、これら各種の開発によってやむなく消滅する遺跡について、記録保存に努めているところであります。

このたび、アサヒビール株式会社の博多工場整備拡充に先立って那珂遺跡群の一角を発掘調査致しました。

発掘調査の結果、弥生時代の貯蔵穴や井戸、祭祀土坑、甕棺墓や土壙墓、古墳時代の竪穴住居址、溝、井戸、古代の井戸など貴重な発見が相次ぎました。

本書は、これら発掘調査の成果を収録したものです。本書が埋蔵文化財に対する認識と理解、さらには学術研究上役立つことができれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査から整理に至るまでアサヒビール株式会社をはじめ、多くの方々のご理解とご協力を賜わりましたことに対し、心より感謝の意を表します。

平成９年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　町　田　英　俊

例　言

1．本書は、福岡市教育委員会が1994（平成６）年９月29日から同年12月20日にかけて発掘調査を実施した、アサヒビール株式会社九州工場増設に伴う那珂遺跡群第50次緊急発掘調査の報告書である。

2．調査地区は２箇所ありA区、B区とした。遺構の呼称は記号化し、竪穴住居址→SC、土坑（墓壙も含む）→SK、井戸→SE、溝→SD、ピット→SPとした。遺構番号は種類に関係なく各区ごとに連番とした。ただしSPはSPだけで各区ごとに番号を付している。

3．本書に使用した遺構図は、上方高弘、茨木浩一、吉田香代が作成した。現場写真は、下村　智、上方高弘が撮影した。遺物実測図は、下村、本田浩二郎、上方高弘、茨木浩一、坂本憲昭、佐田裕一があたった。トレース及び図版作成は、茨木式子、酒井香代子、末次由紀恵、鳥飼悦子、長浦芙美子、室　以佐子、持原良子が行った。遺物写真は下村が撮影した。

4．本書で用いる遺構図の方位は全て磁北である。

5．那珂遺跡群第50次調査に係る遺物、記録類（図面、写真、スライドなど）は、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理される予定である。

6．本書の執筆・編集は下村が行った。

遺跡調査番号	9441		遺跡略号	NAK－50	
調査地地籍	博多区竹下３丁目１－１			分布地図番号	037－A－３
開発面積	6,380㎡	調査対象面積	3,000㎡	調査実施面積	2,215㎡
調査期間	1994年９月29日～1994年12月20日			事前審査番号	６－２－86

本　文　目　次

I　はじめに……1
　1　調査に至る経過……1
　2　調査の組織……1
II　遺跡の立地とこれまでの調査……1
III　調査の記録……3
　1　A区の調査……3
　　(1)　土坑……5
　　(2)　土壙墓・甕棺墓……8
　　(3)　溝……12
　　(4)　祭祀土坑……16

　2　B地区の調査……23
　　(1)　竪穴住居址……23
　　(2)　井戸……23
　　(3)　土坑……33
　　(4)　溝……40
　　(5)　包含層・遺構確認……40
IV　おわりに……42

挿　図　目　次

Fig. 1　那珂遺跡群位置図及び周辺遺跡分布図（1/50,000）……2
Fig. 2　調査区位置図（1/6,000）……4
Fig. 3　調査区範囲図（1/1,500）……4
Fig. 4　A区遺構全体図（1/150）……6
Fig. 5　土坑遺構実測図(1)（1/40）……7
Fig. 6　土坑遺構実測図(2)（1/40）……9
Fig. 7　土坑出土遺物実測図（1/4）……10
Fig. 8　土壙墓・甕棺墓遺構実測図（1/30）……11
Fig. 9　SK09甕棺実測図（1/8）……11
Fig.10　SD04遺構実測図（1/60）……12
Fig.11　SD04土層断面図（1/40）……12
Fig.12　SD04出土遺物実測図(1)（1/6）……13
Fig.13　SD04出土遺物実測図(2)（1/4）……15
Fig.14　SK03遺物出土状況実測図・土層断面図（1/60）……17
Fig.15　SK03出土遺物実測図(1)（1/6）……19
Fig.16　SK03出土遺物実測図(2)（1/6）……20
Fig.17　SK03出土遺物実測図(3)（1/4）……21
Fig.18　SK03出土遺物実測図(4)（1/4）……22

Fig.19　B区遺構全体図（1/600）……25
Fig.20　A・B－5・6区遺構配置図（1/100）……26
Fig.21　SC18遺構実測図（1/40）……26
Fig.22　井戸遺構実測図(1)（1/40・1/80）……27
Fig.23　井戸遺構実測図(2)（1/40）……29
Fig.24　井戸遺構実測図(3)（1/40）……30
Fig.25　井戸出土遺物実測図(1)（1/4）……31
Fig.26　井戸出土遺物実測図(2)（1/4）……32
Fig.27　井戸出土遺物実測図(3)（1/4・1/8）……33
Fig.28　井戸出土遺物実測図(4)（1/4）……34
Fig.29　井戸出土遺物実測図(5)（1/4）……35
Fig.30　井戸出土遺物実測図(6)（1/4）……36
Fig.31　井戸・竪穴住居址・遺構確認時出土遺物実測図（1/2・1/4）……37
Fig.32　石器・鉄器・土製品実測図（1/2）……38
Fig.33　木器実測図（1/2・1/4）……39
Fig.34　第21次・第50次調査区（A区）接合図（1/350）……41

図　版　目　次

PL. 1　(1)　A地区調査区全景（北から）　(2)　貯蔵穴群出土状況（北から）
(3)　SK01出土状況（北から）　(4)　SD02土層堆積状況（北から）
(5)　SK02出土状況（南から）　(6)　SK08出土状況（北から）
PL. 2　(1)　SK10土層堆積状況（北から）　(2)　SK11出土状況（東から）
(3)　SK12土層堆積状況（東から）　(4)　SK14出土状況（東から）
(5)　SK05出土状況（北西から）　(6)　SK06出土状況（北西から）
PL. 3　(1)　SK09出土状況（西から）　(2)　SD04出土状況（北から）
(3)　SD04Ⅰ区遺物出土状況（北から）　(4)　SK03上層遺物出土状況（西から）
(5)　SK03土層堆積状況（東から）　(6)　SK03中層遺物出土状況（北から）
PL. 4　(1)　B地区調査区西半部全景（南から）　(2)　SC16・17・18他出土状況（東から）
(3)　SC18炉址出土状況（東から）　(4)　SE01出土状況（北から）
(5)　SE02出土状況（南から）　(6)　SE02下部遺物出土状況（東から）
PL. 5　(1)　SE03出土状況（東から）　(2)　SE04出土状況（西から）
(3)　SE04遺物出土状況（下層上部）（西から）　(4)　SE04遺物出土状況（下層下部）（南から）
(5)　SE05出土状況（北から）　(6)　SE07出土状況（東から）
PL. 6　(1)　SE08出土状況（北から）　(2)　SE10出土状況（南から）
(3)　SE11出土状況（東から）　(4)　SE11遺物出土状況（東から）
(5)　SE13出土状況（北から）　(6)　SE14出土状況（東から）
PL. 7　出土遺物　(1)
PL. 8　出土遺物　(2)

I　はじめに

1　調査に至る経過

1994（平成６）年６月７日付で、福岡市博多区竹下３丁目１番１号のアサヒビール株式会社博多工場工場長塩原正義氏から、工場地内における装製棟新設に伴う埋蔵文化財の事前調査願が市教育委員会埋蔵文化財課に提出された。埋蔵文化財課では、那珂遺跡群の範囲内であり、これまで、同工場内で第10～12次、第14～17次、第21次の本調査を実施していることから、申請地内にも埋蔵文化財の包蔵することが容易に推測できた。周辺部では、弥生時代の集落や墓地、環濠、井戸、古墳時代の集落や前方後円墳、奈良時代から中世にわたる遺構が密度濃く分布している。そこで、既設建物の解体が終了し、試掘に支障が無くなった同年６月27日に試掘調査を実施したところ、弥生時代から古代にかけての竪穴住居址、井戸、溝、土坑、柱穴群などが出土し、予想どおり遺構群の広がりが確認できた。この試掘調査の結果をもとに遺跡の取り扱いについて関係者と協議を重ねたところ、建物建設によって破壊される遺構群については本調査を実施するということで協議がまとまった。本調査はアサヒビール株式会社の受託調査として同年９月29日から着手した。

2　調査の組織

調査の組織は以下の通りである。

調査委託：アサヒビール株式会社　博多工場　工場長　塩原正義
調査受託：福岡市　　福岡市長　桑原敬一
調査総括：埋蔵文化財課長　折尾　学　　埋蔵文化財第２係長　山崎純男
調査庶務：埋蔵文化財第１係長　横山邦継　吉田麻由美
調査担当：山口譲治　菅波正人（試掘調査）　埋蔵文化財第２係　下村　智（本調査）
調 査 員：上方高弘　吉田香代　茨木浩一
調査作業：上野龍夫、梅木繁良、志堂寺　堂、立水　清、谷　英二、大長正弘、徳永榮彦、徳永静雄、広田安平、松井一美、村山市次、吉住作美、本村久利、森山恭助、江嶋光子、黒瀬千鶴、高野瑛子、武田潤子、永松伊都子、永松トミ子、西本スミ、野口ミヨ、日尾野典子、山下智子、山本后代、森山タツエ
整理作業：茨木式子、酒井香代子、末次由紀恵、鳥飼悦子、長浦芙美子、室　以佐子、持原良子

II　遺跡の立地とこれまでの調査

那珂遺跡群は、福岡平野のほぼ中央部、那珂川と御笠川にはさまれた中位段丘上に位置する。標高は７～10m前後を測る。基盤は鳥栖ロームで、下部は黄白色の八女粘土、さらに下部になると灰色の阿蘇IVの溶結凝灰岩風化層となる。

遺跡の位置する那珂台地は、南が春日丘陵に連なり、北方は標高５～６mの比恵の台地部へと続く。これらの台地上には、後期旧石器時代から中世までの遺跡が連綿とみられ、とりわけ弥生時代から古代にかけての遺跡密度は非常に高い。

那珂遺跡は比恵遺跡の南側にあたり、比恵遺跡よりも標高がやや高いが本来一連の遺跡と考えられ

1 **比恵遺跡群**
2 **那珂遺跡群**
3 席田青木遺跡
4 席田久保園遺跡
5 席田赤穂ノ浦遺跡
6 席田大谷遺跡
7 宝満尾遺跡
8 下月隈天神森遺跡
9 金隈遺跡
10 板付遺跡
11 諸岡B遺跡群
12 五十川遺跡群
13 雀居遺跡2・3次調査地点
14 雀居遺跡4・5次調査地点
15 博多遺跡群

Fig.1 那珂遺跡群位置図及び周辺遺跡分布図(1/50,000)

る。1971年の九州大学考古学研究室による第1次調査以来1997年度までに58次の調査を行っている。

以下、弥生時代について遺跡の内容を概括しておきたい。

集落 比恵遺跡と同様、縄文晩期終末から弥生前期にかけて台地周辺部で3～4箇所の集落が形成される。南側の37次、西側の23次、西北側の10次・14次・21次、東側の4次・5次調査などがそれにあたり、二重環濠や貯蔵穴、甕棺墓などが確認されている。弥生中期になると集落は台地中央部で展開されるようになり、20次・23次調査では中期末の環濠が造られる。後期になるとさらに南側にも集

落が形成される。

環濠　37次調査で縄文晩期終末の二重環濠が検出され、外環濠は最大幅4.9m、深さ1.5mの「V」字溝、内環濠は最大幅2.0m、深さ0.8mの逆台形溝になっている。外環濠の外径は約150mほどに復元されている。20次と23次調査では台地を東西に横切る幅2.7m、深さ1.6mの逆台形溝が検出されている。23次調査区の西側でこの溝は北西側にまわり込むことから環濠の一部と考えられる。溝内からは、筒形器台を中心とする丹塗りの祭祀土器が多量に出土している。

大型掘立柱建物　23次調査の環濠北側で梁行５間、桁行８間になると考えられる建物が出土している。梁行は7.3m、桁行は推定13.5m程度であろう。中央部に棟持柱の柱穴がある。この建物の東側には主軸を同じ方向にとる１間×２間の建物が存在する。時期はともに弥生中期末である。37次調査では梁行5.34m、桁行9.7mの１間×４間の大型建物が確認されている。

井戸　比恵遺跡に比べ極端に少なく100基に満たない数が調査されているに過ぎない。弥生中期後半から後期終末にかけての土器群や木製品などが出土している。

墓地　４箇所で確認されている。４次調査を中心とする地域は前期末の金海式甕棺を主体としている。それ以外の墓地は弥生中期からそれ以降の時期である。16次調査では甕棺墓35基、木棺・土壙墓14基が調査されている。21次調査では墓地を取り囲むように２条の祭祀土坑が確認され多量の丹塗り土器が出土している。38次調査でも甕棺墓地が新たに見つかり甕棺墓16基、土壙墓２基が調査されている。いずれも一部の調査なので墓地はさらに拡大する可能性がある。

金属器　今のところ銅鏃は確認されていない。青銅鋤先は10次・18次・20次・21次・23次調査で合わせて７例の出土がある。鉄器は弥生終末に属する鉄鎌が32次調査で、鉄鏃が33次調査でそれぞれ出土している。

鋳型　１次と20次調査で中広銅戈がそれぞれ１点ずつ、８次調査では中細銅矛の中子と取瓶片、23次調査では中細銅戈の鋳型が３点出土している。銅戈の鋳型は両面使用の量産型である。石英・長石斑岩でほとんど砥石に転用され溝などに廃棄された状態で出土している。23次調査では鋳造鉄斧の中子ではないかとみられる土製品も出土しており検討が必要である。

木製品　井戸などから木製農工具類、容器類などが出土しているが、比恵遺跡ほど出土量は多くない。縁辺部の低湿地や井戸などの調査が少ないせいもあるかも知れない。

那珂遺跡では、縄文晩期終末から弥生前期にかけて台地周縁部の数箇所で集落が形成され始め、弥生中期から後期にかけては台地中央部全面に展開する。環濠が巡らされ、環濠内には祭祀に使用された丹塗り研磨の土器群がまとまって出土している。また、環濠内側には桁行が10mを超える大型建物も存在する。那珂遺跡は比恵遺跡をも含めて考えれば福岡平野では中心的な位置を占める遺跡であるといえよう。

Ⅲ　調査の記録

１　A区の調査

第50次調査の対象地は２箇所に分かれていたので、それぞれA区、B区と分けて調査を実施した。A区は第21次調査区の西側隣接地で、連続した遺構群が検出された。調査区南側では貯蔵穴群がまとまって分布し、東側では第21次調査におけるSD49の延長が確認できた。また、調査区西寄りでは南北方向をとる大溝が出土し古式土師器がまとまって出土している。

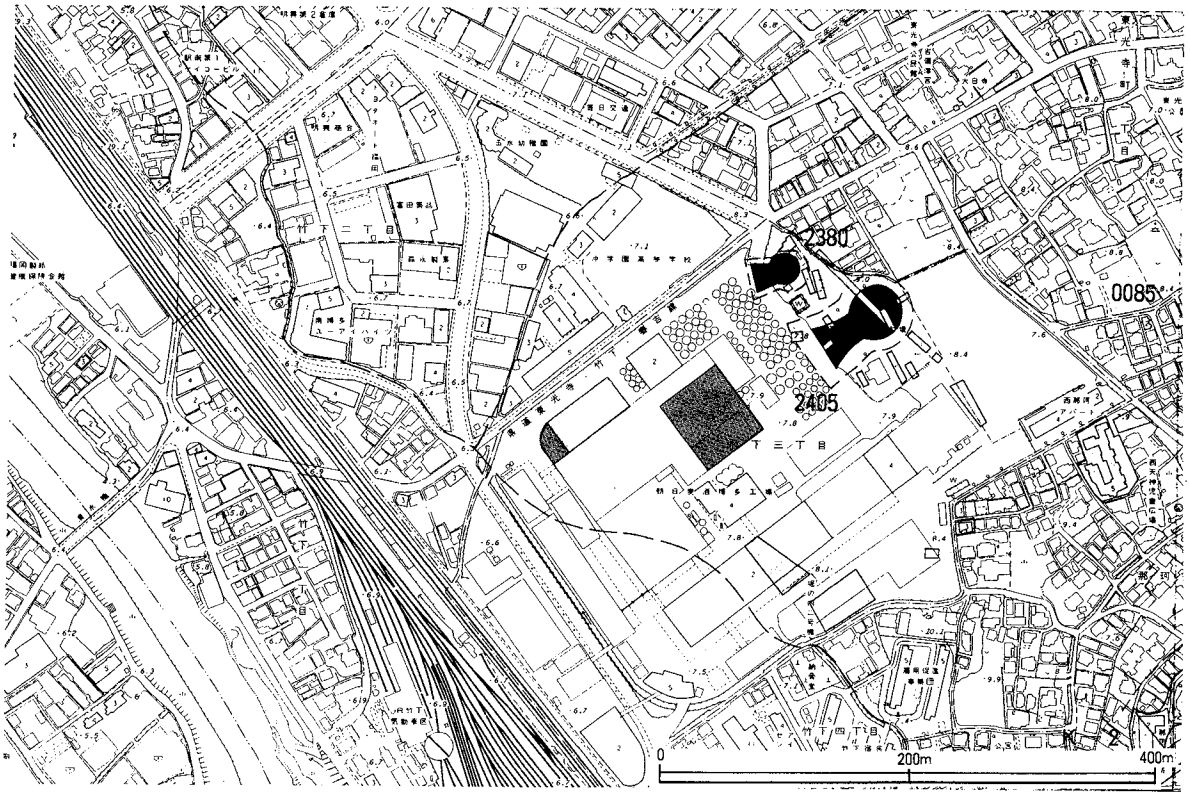


Fig.2　調査区位置図(1/6,000)

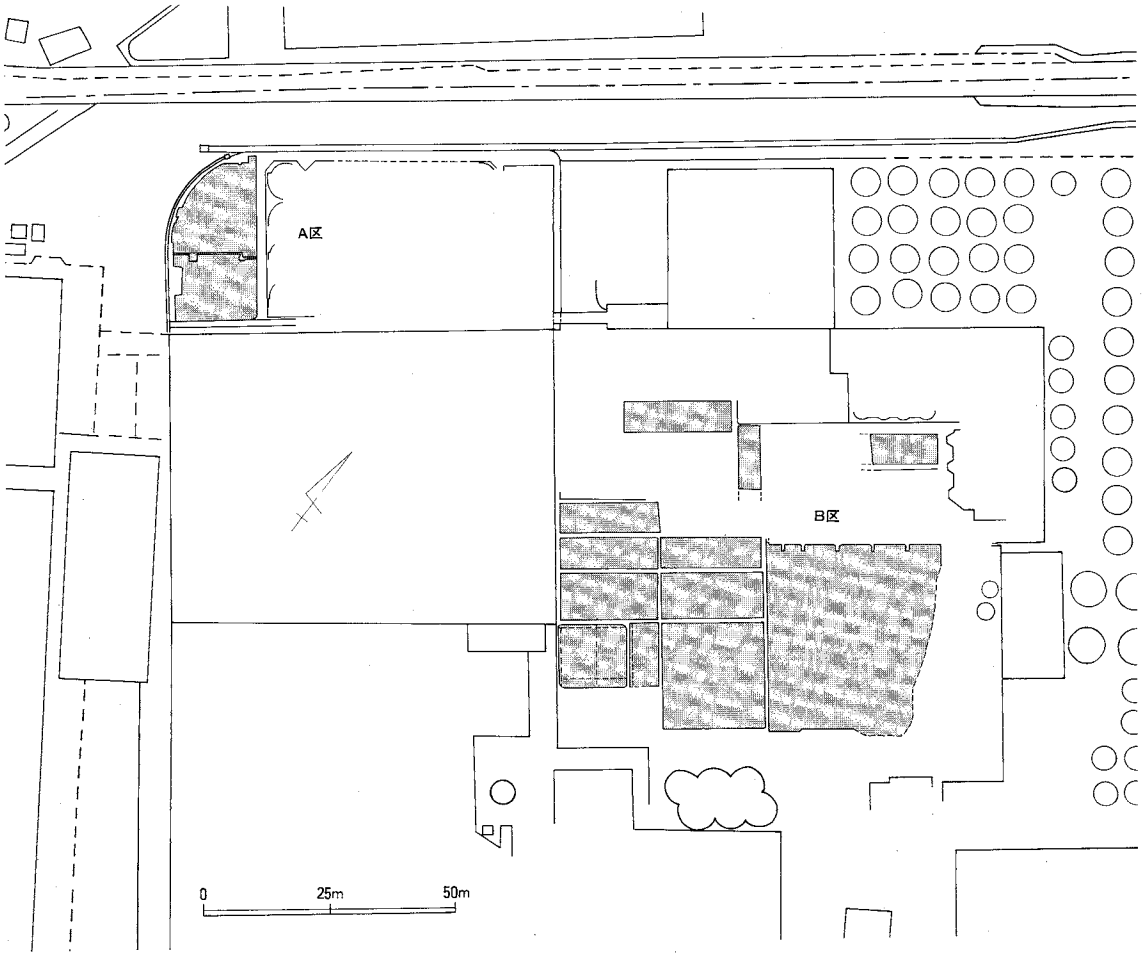


Fig.3　調査区範囲図(1/1,500)

(1) 土坑

SK01（Fig.5・7，PL.1） D－1・2区、調査区南側の壁際で検出されたもので、半分は未調査区へ広がる袋状貯蔵穴である。SK10の東側に位置する。検出面の上面径は1.97m、最大径1.88m、深さ0.37mを測る。北から西側にかけて壁面が0.3m程抉れる。底面はほぼ平坦になる。夜臼式土器の深鉢片、板付II式の甕・壺、黒曜石の剥片や石核などが出土している。Fig.7－1は夜臼式土器の深鉢口縁部片で、突帯にヘラ状工具による刻目を施す。2は壺形土器の底部で、外面にタテハケ目を施した後、横方向のヘラ磨きを加えている。板付II式の中段階に属するものであろう。

SK02（Fig.5・7・32，PL.1）D－1区、SK01の東側に位置する、平面略円形を呈し、上面の長径は1.85m、短径1.53mを測る。深さは，1.17mで、底面は径2.96mの円形を呈し、この部分が最大径となる。底面の中央やや西寄り及び東端部に浅い柱穴状の窪みが存在する。夜臼式土器の深鉢、板付II式の甕・壺・鉢、黒曜石の剥片や石核、磨製石斧片などが出土している。Fig.7－3・5・6は甕である。3は口径26.4cm、残高18.2cmを測る。口縁部は強く外反し端部全面にヘラ状工具による刻目を施す。外面はやや細かいタテ方向の丁寧なハケ目調整を施す。5は如意形の口縁部を有する甕で、端部にヘラ状工具による刻目を施す。6は底部である。4は夜臼式土器の深鉢口縁部である。7～9は中型の壺底部である。外面はともにヘラ磨きが施されている。10～12は小型の壺形土器である。10は口縁部で外面をやや肥厚させる。11は肩部で胴は強く屈曲する。12は高台状になった平底の底部である。Fig.32－241は石庖丁である。下層から出土したもので、一部破損している。残長9.4cm、高さ5.4cm、厚さ0.4cmを測る。安山岩の扁平な板石が素材として使用されている。刃部には使用痕がみられる。SK02は今回調査した貯蔵穴の中では最も残りが良かったもので、規模も他に比べ大きい。出土遺物は板付II式の中でも古段階に属するものであり、前期前半に位置づけられよう。

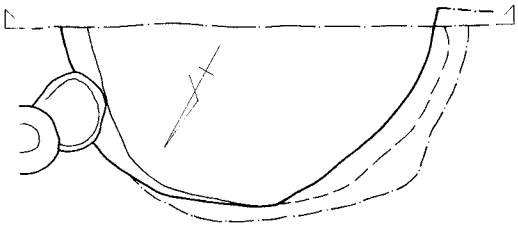
SK07（Fig.5・7） D－2区で検出された袋状貯蔵穴である。SK10の北西に位置し、上面径0.85m以上、最大径1.56m以上、底径1.25m以上、深さ0.97mを測る。大半を撹乱によって破壊されており、本来の規模は不明である。最大径部は確認面下0.55mにある。Fig.7－14～17は出土遺物である。14～16は甕口縁部で、刻目は14・15が端部全面に、16は下端部にのみ施されている。18は高台状の底部を有する小型の壺である。17は甕底部で外面にタテハケ目調整が施される。石器は磨製石斧片、黒曜石の剥片や石核、石鏃などが出土している。出土遺物群は板付II式のやや古い段階か。

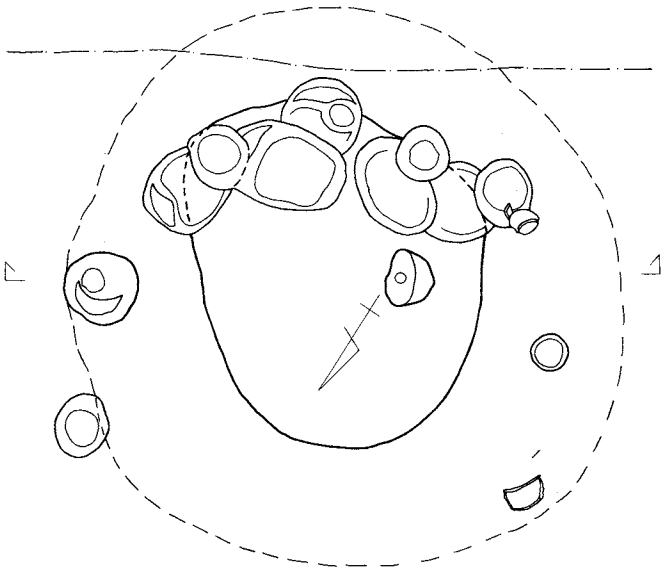
SK08（Fig.6・7・32，PL.1） C・D－1・2区、SK07の北東、SK02の西側に位置する。北側及び西側を撹乱によって破壊されている。平面径はやや歪つな楕円形を呈するものと思われる。長径1.6m以上、短径1.2m以上、深さ0.75mを測る。最大径部は深さ0.3mのところにあり、約0.3m抉れて袋状になる。最大径は1.95m以上になる。遺物は上層・中層から板付II式の甕・壺、下層からも板付II式に属する甕や壺が出土している。黒曜石の剥片や砥石なども出土している。Fig.7－19は壺の口縁部である。上層から出土したもので、口縁部外側を肥厚させ、頸部との境に段を有する。Fig.32－242は黒曜石製の石鏃未成品であろう。先端部は折損しており、基部には礫面が残る。上層から出土したものである。

SK10（Fig.6，PL.2） D－2区で検出したもので、SK01の西側に位置する。調査区南側の壁際で出土し半分は調査区外へ広がる。長さ1.52m、幅0.68m以上、深さ0.7mを測る。坑底は西側に2段、東側に1段のテラスを有する。遺物は須恵器坏蓋（IIIb）、甕片、土師器甕片などが出土している。6世紀後半代に属するものであろう。

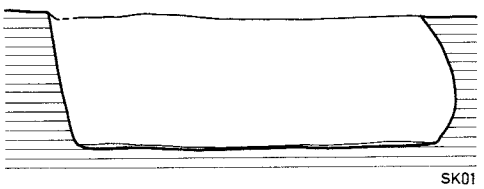
SK11（Fig.6・7，PL.2） B－2区のSD04の西側に位置する袋状貯蔵穴である。検出面の上面径は2.35×2.1mの略円形を呈する。最大径は2.2mで深さ0.43m、最大径部は深さ0.3～0.35mの所にあ

Fig.4　A区遺構全体図(1/150)



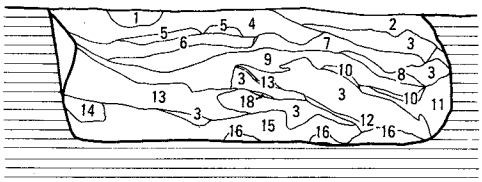


H=8.00m



SK01

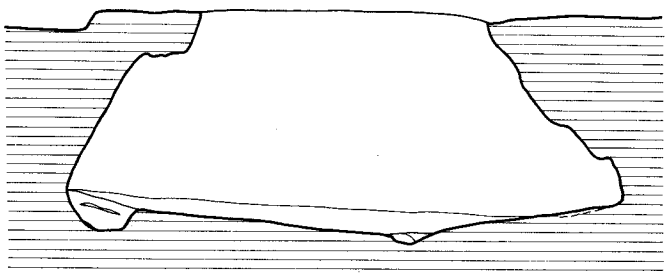
H=8.00m



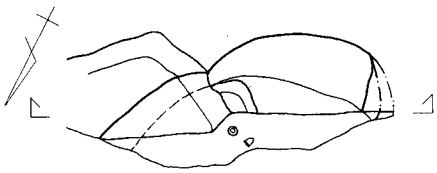
SK01土層名称

1.暗茶褐色粘質土(ロームブロック含む)
2.暗黒灰色粘質土(ロームブロック含む)
3.地山ローム崩落土(黄褐色粘質土)
4.暗茶褐色粘質土
5.暗灰褐色粘質土(ロームブロック多い)
6.暗灰褐色粘質土
7.暗茶褐色土(ロームブロック含む)
8.黒灰色粘質土(ロームブロック多い)
9.黒褐色粘質土(ロームブロック少量含む)
10.黒褐色粘質土(ロームブロック多い)
11.暗黒灰色土
12.暗黒褐色土
13.暗茶褐色粘質土(粒子状のローム及び炭化物少量含む)
14.黒灰色粘質土(大型のロームブロックを多く含む)
15.暗茶褐色粘質土(炭化物を含まない)
16.暗黒灰色土

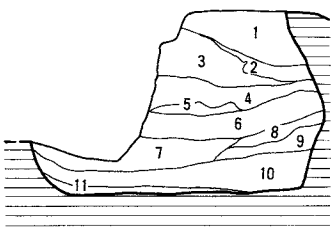
H=8.00m



SK02



H=7.80m

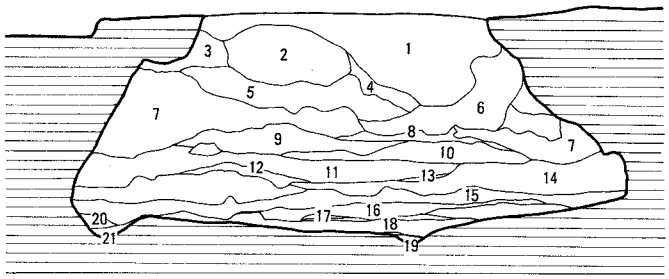


SK07

SK07土層名称

1.明黄褐色粘質土(灰色のよごれを含む 地山崩落土)
2.黒灰色粘質土(ローム小ブロック含む)
3.明黄褐色粘質土ブロック
4.茶褐色土(やや明るい・ロームブロック・炭化物含む)
5.茶褐色土(やや明るい・黒灰色粘質土ブロックを含む)
6.茶褐色土(やや明るい・炭化物4層より少い)
7.暗灰褐色土(ローム・炭化物含む しまりなくやわらかい)
8.茶褐色粘質土(炭化物含む)
9.茶褐色土(8層より炭化物粒子多い)
10.暗灰褐色粘質土(非常に細かなローム層に炭化物を多く含む)
11.明灰褐色土(ローム含む 軟質)

H=8.00m



0 1 2m

SK02土層名称

1.暗灰褐色土(ロームブロックわずかに含む)
2.暗灰褐色土(粒子状のロームブロックを含む)
3.暗灰褐色粘質土(ローム粒少量)
4.暗灰褐色土(大部分はロームブロック)
5.茶褐色粘質土(粒子状のロームブロックをやや多く含む)
6.灰褐色粘質土(ローム小ブロック多い)
7.明灰褐色粘質土(黒灰色粘質土によるよごれ有)
8.黒灰色粘質土
9.暗黒灰色粘質土(やや大型のロームブロック多い)
10.明灰褐色粘質土(ややよごれる 地山崩落土)
11.黒灰色土
12.黒灰色土(ロームブロックを少量含む)
13.黒灰色土(粒子状のロームを少量含む)
14.茶褐色土(粒子状のローム及び炭化物含む)
15.大型のロームブロックを含んだ茶褐色土
16.暗黒褐色土(炭化物・ローム粒含む)
17.黒色粘質土
18.黄灰色粘質土(地山崩落土)
19.淡灰褐色土
20.淡灰褐色土(ロームブロック多く含む)
21.灰色粘質土

Fig.5　土坑遺構実測図(I)(1/40)

る。底面形は歪つな楕円形を呈し、径1.9×1.85mを測る。Fig.7－20～29は上層及び下層から出土した遺物である。20は復元口径26.5cm、復元器高24.0cmを測る甕である。如意形の口縁端部全面に刻目を施す。調整は縦方向のやや細かなハケ目調整が施される。板付Ⅰ式に属するものであろうか。21は板付Ⅱ式の甕、22は下層出土の中期初頭に属する甕である。23・24は甕の底部である。25は壺の肩部、26は中期初頭の壺口縁部である。下層からの出土である。27～29は板付Ⅱ式と考えられる壺の底部及び口縁部である。28は口縁内面を肥厚させたところで破損している。石器は磨製石斧片、黒曜石の破片などが出土している。下層出土の土器に中期初頭のものがみられるところから、時期は中期初頭と考えて差しつかえなかろう。

SK12（Fig.6・7・32，PL.2）　B－2区、SK11の南側に位置し、調査区壁際で検出した袋状貯蔵穴である。半分以上は調査区外へ広がっている。径2.05m、深さ1.10m、最大径は下端にあり2.53mを測る。中央付近及び南側端に柱穴状の窪みを有し、0.23m深くなる。Fig.7－30～37は出土遺物である。30・31は中層及び上層から出土した甕である。口縁端部全面にヘラ状工具による刻目を施す。32は小型壺の肩部である。3条の横沈線と縦方向の複合三角文を施す。沈線内には赤色顔料が残る。外面はヘラ磨きで調整されている。33は下層から出土した壺の口縁部である。口縁外面は肥厚させ、頸部との境に段を有する。34は壺の肩部である。沈線で僅かな段を形成する。35～37は壺の底部である。外面は横方向の粗いヘラミガキで調整されている。石器は、黒曜石の石刻、剝片、下層からは柱状片刃石斧が出土している。Fig.32－250はその柱状片刃石斧である。全長8.35cm、最大幅1.6cm、最大厚1.2cmを測り、淡灰色を呈した頁岩製である。側面には素材調整時の剝離痕を残し、全面に細かな研磨痕が観察される。SK12は出土遺物から板付Ⅱ式の古段階に位置づけられよう。

SK13（Fig.4）　B－2区に位置し、SD04の西側肩部で検出した不整な長楕円形を呈する浅い土坑である。長径0.95m以上、短径0.6m、深さ0.1mを測る。東側はSD04に切られている。遺物の出土は極端に少なく、弥生前期土器片が少量出土しているに過ぎない。

SK14（Fig.6，PL.2）　A－2区で検出した長方形土坑で、SK09の北側に位置する。長さ2.0m以上、幅1.65m、深さ0.46mを測る。弥生中期中葉から後半にかけての土器片が出土している。

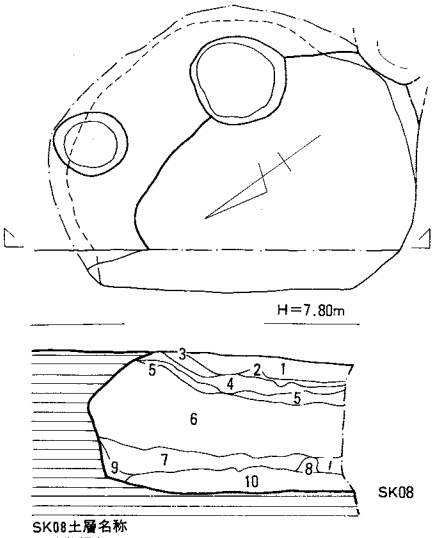
SK15（Fig.4・7）　C・D－1区で検出した土坑である。SK10の北に位置し、北側及び西側を撹乱によって破壊されており一部分のみ確認できた。検出した長さ1.45m以上、幅0.5m以上、深さは0.37mである。遺物の出土は少ないが板付Ⅱ式の壺口縁部が出土している。Fig.7－38はその壺口縁部である。口縁は強く外反し、外面を肥厚させる。残高2.7cm、内外面とも灰褐色を呈し全面にヘラ磨きが施される。胎土には3～5mm大の石英・長石粒を多く含む。

SK16（Fig.4）　B－2区で検出した不整形土坑である。SD04の西側に位置し、長さ1.8m以上、幅1.75m、深さ6cmを測る。須恵器坏身(Ⅳb)、坏蓋、土師器片などが出土している。古墳時代後期後半代に属するものであろう。

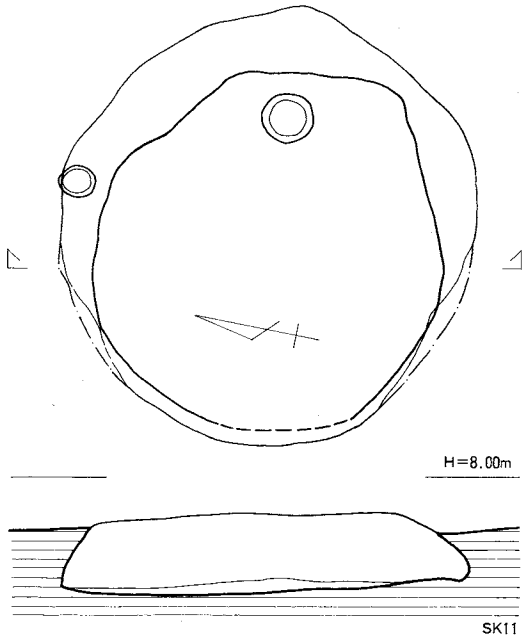
(2) 土壙墓・甕棺墓

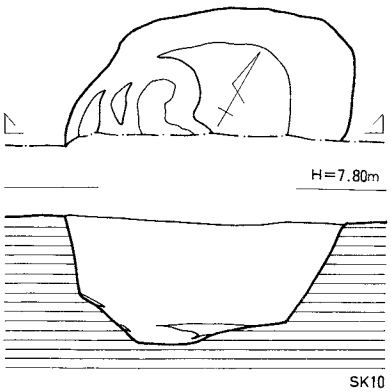
土壙墓、甕棺墓については隣接の第21次調査区でまとまって出土している。第50次調査でその西側の広がりを確認することができた。遺構の分布密度は高くない。

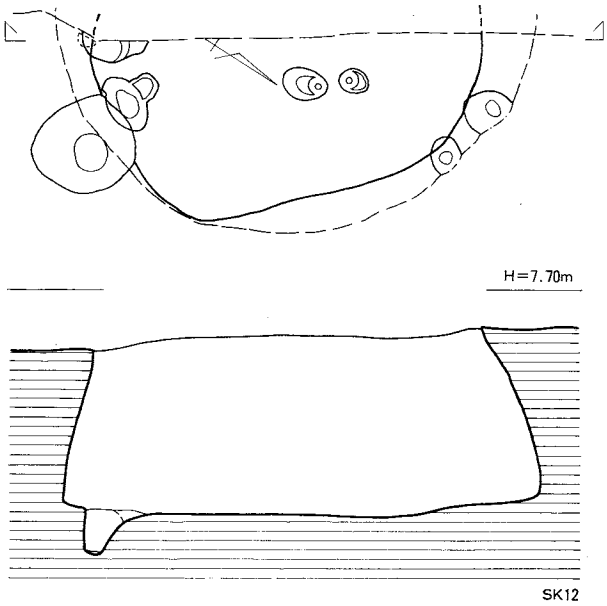
SK05（Fig.7・8，PL.2）　C－1区で出土したもので、SK06の南側に位置する。平面形は長方形を呈し、長さ1.30m以上、幅0.5m、深さ0.14mを測り、かなり削平を受けている。主軸はN81°Wである。東側は撹乱によって破壊されている。底面は東へ向ってやや傾斜しており、東端部はさらに一段と深くなる。西側小口幅がやや広くなっており、頭位は西に置くものと考えられる。人骨は出土していないが次に説明するSK06と規模や方向等が類似しているところから墓壙と考えて差しつかえなか

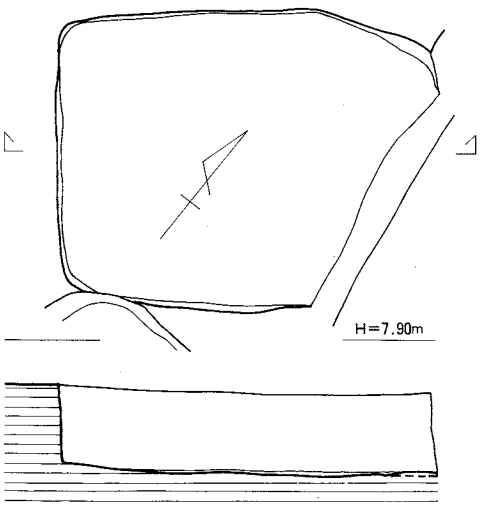


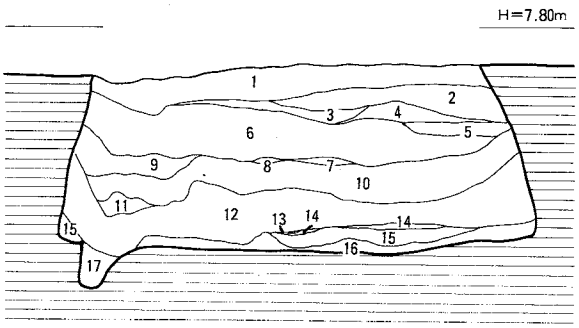
SK08土層名称
1.暗茶褐色土
2.茶褐色粘質土
3.黒灰色粘質土
4.暗茶褐色土(炭化物少量含む)
5.黒褐色粘質土(ローム小ブロック少量含む)
6.暗灰褐色土(ローム粒・炭化物含む)
7.黄褐色粘質土(黒灰色のよごれを含む 地山崩落土)
8.暗黒褐色粘質土(ロームブロック含む)
9.黒褐色土(ロームブロックやや多く含む)
10.暗黒灰色土(粒子状のローム及び炭化物含む)











SK12土層名称
1.暗茶褐色粘質土(粒子状のロームブロック含む)
2.暗茶褐色粘質土(やや大型のロームブロック・炭化物含む)
3.茶褐色粘質土
4.暗茶褐色粘質土(炭化物含む)
5.茶褐色粘質土(ロームブロック多い)
6.明灰褐色土
7.淡灰褐色粘質土(ロームブロック多い。炭化物含む)
8.淡黒灰色土(ロームブロック・炭化物含む)
9.明灰褐色粘質土(粒子状ローム含む)
10.明灰褐色粘質土(ロームブロック・炭化物含む)
11.茶褐色のよごれを含むロームブロック
12.暗茶褐色粘質土(ロームブロック・炭化物多い)
13.暗茶褐色粘質土(ローム多い)
14.ロームブロック
15.灰褐色粘質土(ロームブロック多い)
16.灰色粘質土(ロームブロック多い)
17.灰褐色粘質(しまりなく軟質)

0 1 2m

Fig.6 土坑遺構実測図(2)(1/40)

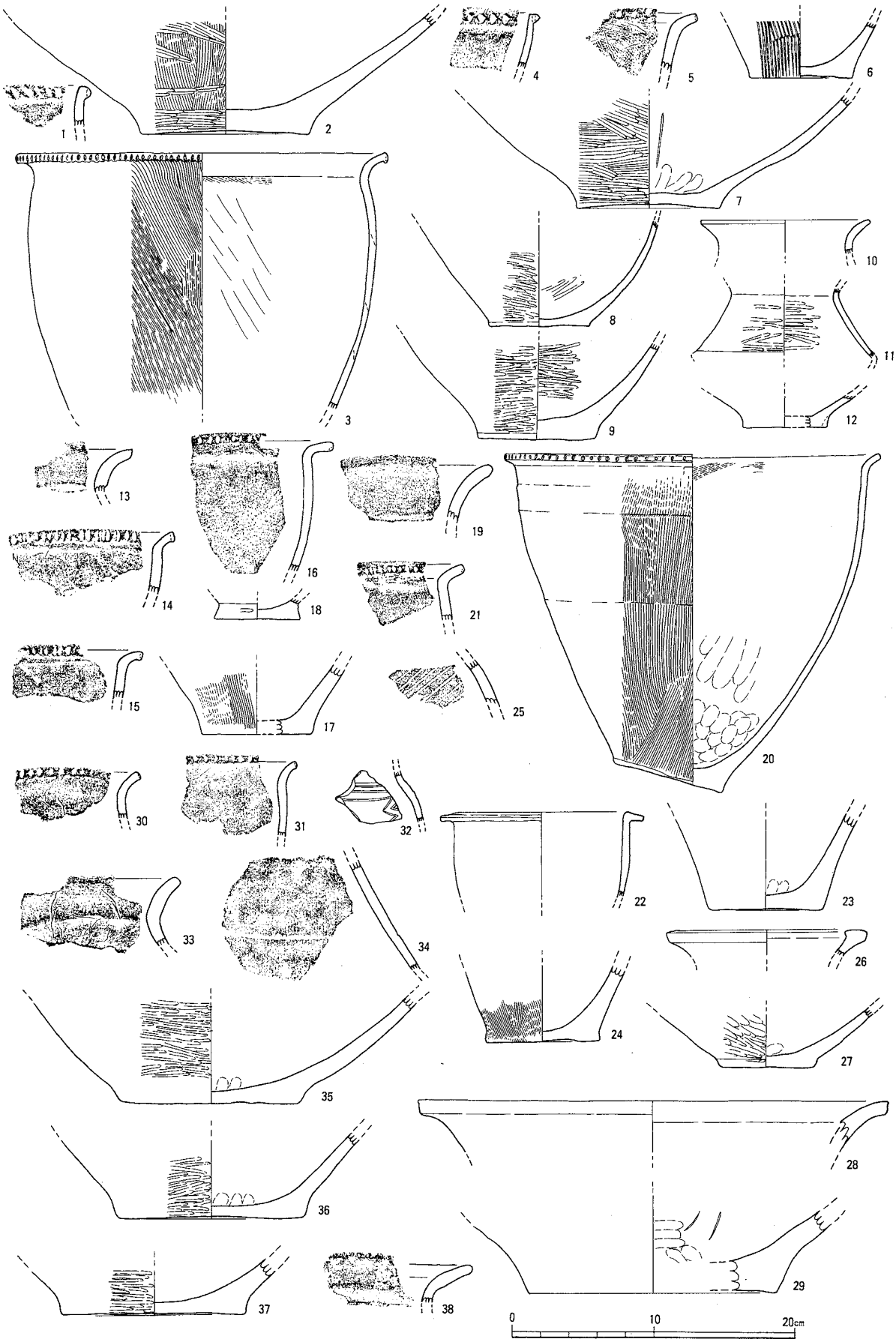


Fig.7　土坑出土遺物実測図(1/4)

SK01：1～2、SK02：3～12、SK05：13、SK07：14～18、SK08：19、SK11：20～29、SK12：30～37、SK15：38

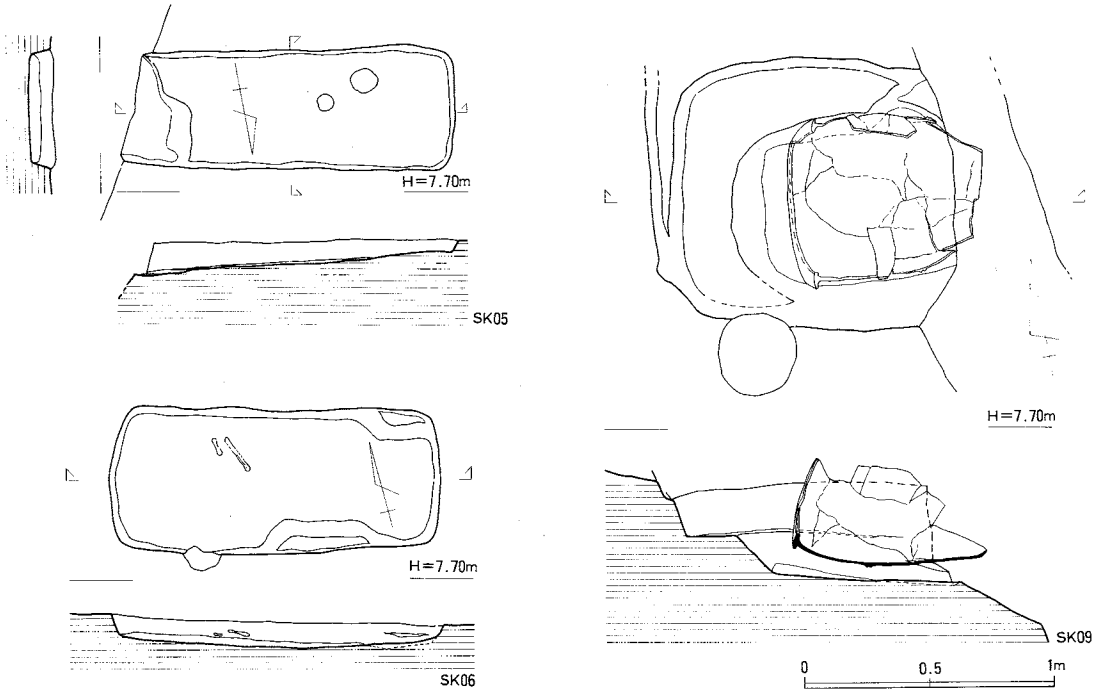


Fig.8　土壙墓・甕棺墓遺構実測図(1/30)

ろう。Fig. 7 －13は出土した板付II式の壺口縁部である。外反する口縁部の外面は肥厚させ、頸部との境に段を有する。明褐色を呈し、外面にはヘラ磨きが施される。弥生前期前半から中葉頃のものであろうか。

SK06（Fig. 8，PL. 2）　C－1区に位置する。平面形は長方形を呈し、長さ1.31m、東側小口幅0.5m、西側小口幅0.57m、深さ0.13mを測る。主軸はSK05と同様略東西方向をとり、N76°Wである。西側小口幅がやや広く、頭位は西側になるものと考えられる。壙内からは部位ははっきりしないが人骨片が出土している。出土遺物が無いので時期は決め難いが、SK05とほぼ近い時期になるのではなかろうか。

SK09（Fig. 8・9，PL. 3）　A－2区、SK14の南側に位置する単式の甕棺墓である。東側をSD04で切られており底部が欠失している。主軸は略東西方向をとりN80°Wである。長さ1.22m以上、幅1.

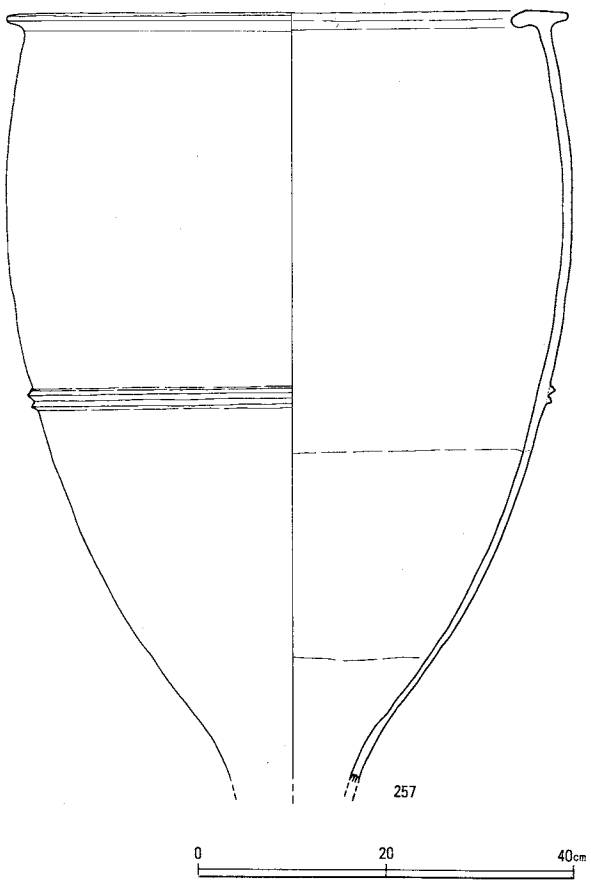


Fig.9　SK09甕棺実測図(1/8)

09m、深さ0.4mの略長方形を呈する墓壙を持つ。Fig.9－257の甕は口径60.6cm、残高83.0cmを測り、口縁部はT字状に近いが内側を肥厚させている。口縁下に突帯は無く、胴部に三角突帯を2条巡らす。内外面とも明褐色を呈し1～3mm大の石英・長石粒を含む。器面は全体にナデ調整が施されている。弥生中期前半代でも新しい時期に属する甕棺である。

(3) 溝

SK04（Fig.10～13・32, PL.3・7・8）　調査区西側をほぼ南北方向に伸びる断面逆台形の溝である。場所によってはV字状に近くなる。やや東側に弧を描いて伸びている。幅2.02m、深さ1.33mを測り、途中で稜を有して底面に至る。幅の割りには深い溝である。溝がある程度埋まった中層で古式土師器がまとまって出土している。Fig.12－39・40は伝統的五様式系統の甕である。39は口径15.9～16.4cm、胴径27.5cm、底径4.5cm、器高32.4～33.0cmを測る。底面は窪み粘土が充填されている。胴部下

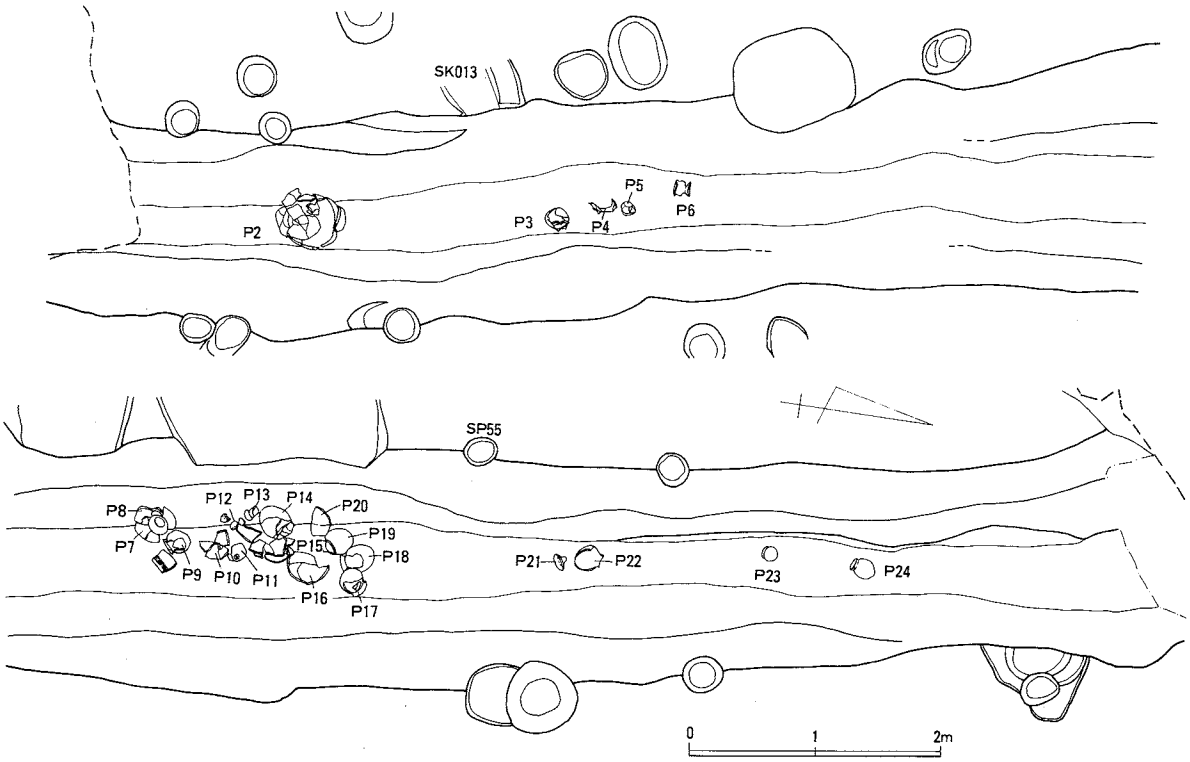
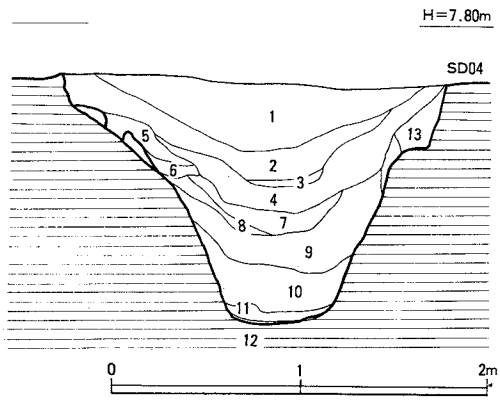


Fig.10　SD04遺構実測図(1/60)



SD04土層名称

上層
1.暗黒褐色粘質土(かたくしまる)
2.暗茶褐色土
3.暗茶褐色土(ロームブロックまじり)

中層
4.茶褐色土(ローム小ブロック含む)
5.茶褐色土(やや明るい)
6.茶褐色土(ロームブロック多い)
7.暗茶褐色土(ローム小ブロック含む)
8.暗茶褐色土

下層
9.茶褐色土(粒子状のロームブロック多い)
10.茶褐色土(粒子状のロームブロック多い。9層よりやや暗く粘質)
11.地山ローム崩落土
12.黒灰色粗砂
13.暗灰色粘質土(ロームブロック多い。柱穴埋土)

Fig.11　SD04土層断面図(1/40)

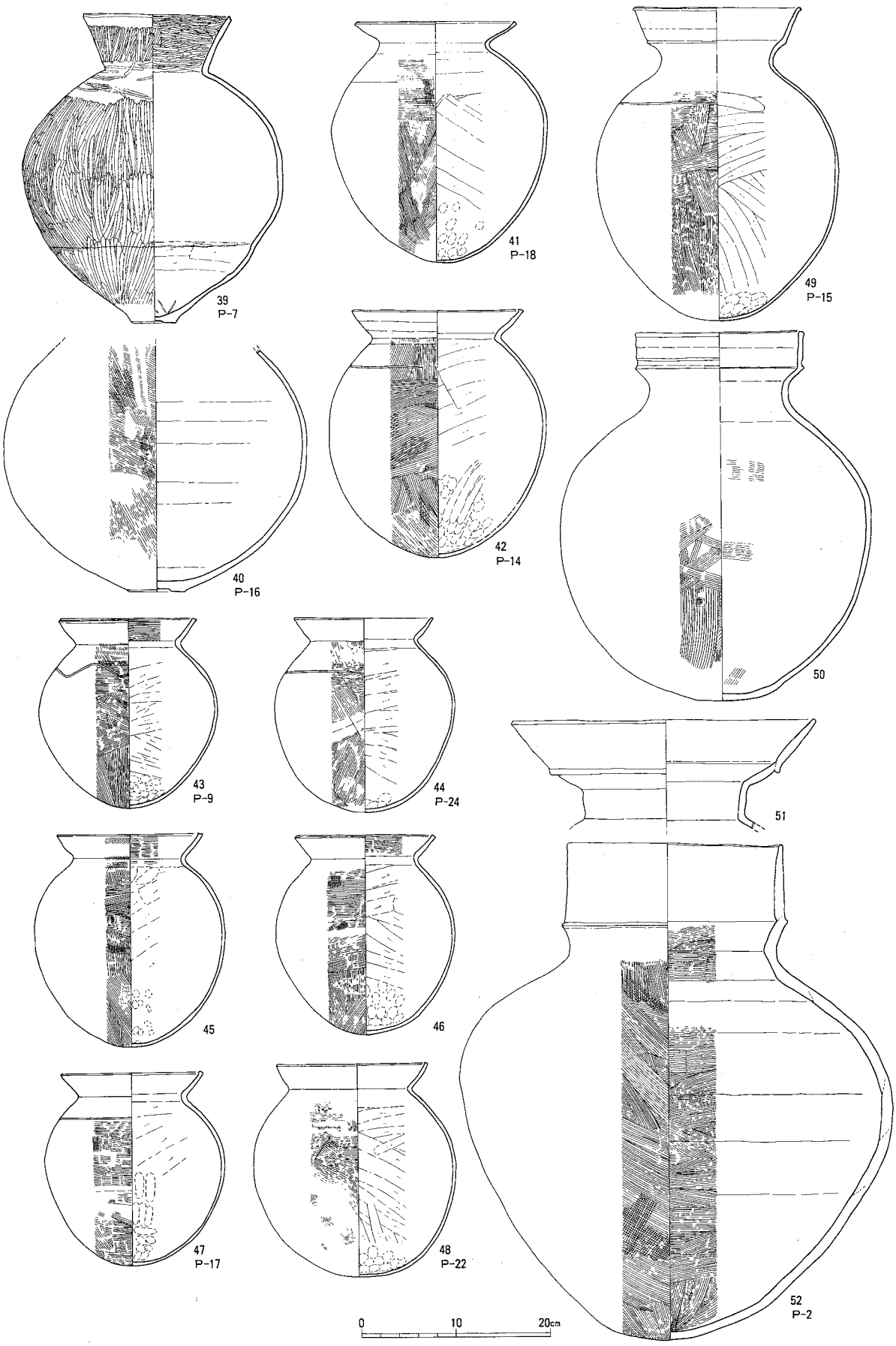


Fig.12　SD04出土遺物実測図(1)(1/6)

半には粘土の接ぎ目が観察される。器形は球形の胴部にやや開き気味のストレートに立ち上がる口縁部を有する。口縁端部は少し窪む。外面調整は口縁部が縦方向のヘラ磨き、肩部は横方向の粗いヘラ磨き、胴部は縦方向のヘラ磨きとなる。ただし、胴部最大径の部分は左上りのヘラ削りの後ヘラ磨きが施されている。内面は横方向のヘラ磨き、胴部は横方向のナデ、胴下半部の粘土接合部は横方向のヘラ削りが施されている。底面近くにはヘラ当て痕が観察される。外面は淡褐色～橙褐色、内面は淡褐色を呈し、外面胴下半部から底部にかけて黒斑が認められる。胎土には１～３㎜大の石英・長石粒、赤色粒子を含む。焼成は良好である。口縁部に径0.5cmの焼成前の穿孔が認められる。40は口縁部を欠失しているが、復元胴径32.0cm、底径5.9cm、残高25.8cmを測る。胴部は球形を呈し、底面は窪む。外器面はハケ目調整が施されたあと胴上半部から中位にかけてヘラナデ痕が観察される。内器面はナデ調整で粘土紐の接合痕が残る。外面は褐色～茶褐色を呈し底部は黒褐色となる。内面は褐色～暗褐色を呈する。胎土には石英・長石粒を多く含む。焼成は良好である。41～48は布留式の甕である。41は口縁部が強く開き端部は肥厚させる。肩部はややなで肩で縦方向のハケ目調整の後横方向のハケ目、胴下半は縦及び斜め方向のハケ目調整が施される。内面はヘラ削り、底面近くは指頭圧痕が多く残る。口径17.1cm、胴径22.6cm、器高25.3cmを測る。外面は灰褐色を呈する。42は口径18.1cm、胴径22.9cm、器高26.8cmである。口縁端部は内側をつまみ出し、肩部に棒状工具（ヘラか）端部による横沈線を施す。外器面には肩部に縦方向、胴中位に横方向、胴下半に斜め方向のハケ目調整を施す。内器面では、ナデ、ヘラ削り、指オサエが施されている。43は口径14.6cm、胴径18.9cm、器高20.1cmを測る。口縁端部はやや肥厚し、口縁部外面にタタキの痕跡が残る。肩部にはハケ目調整の後波状の沈線が加えられている。色調は灰白色を呈し、胎土は精良で石英・長石を少量含む。一括出土の中ではやや古手に属するものであろう。44は口径14.8cm、器高20.6cmを測り、肩部にやや蛇行したヘラ状工具端部による沈線を施す。内外面とも灰白色を呈する。45は口縁端部を肥厚させ、端部中央部を窪ませている。口径15.4cm、器高22.6cm、胴径20.1cmを測る。肩部にハケ目原体による連続列点文を５個施す。46は胴中位から上位にかけて縦方向のハケ目調整の後横方向のハケ目調整を加える。胴下半は縦方向のハケ目調整を施す。口径14.9cm、胴径19.0cm、器高21.1cmを測る。胎土には石英・長石を少量含み、内外面とも灰褐色を呈する。47は口径15.1cm、胴径19.0cm、器高20.6cmを測る。口縁端部は内側につまみ出す。肩部にはヘラ状工具による横沈線を施す。48は口径15.9cm、胴径21.4cm、器高22.6cmを測る。これらの甕は布留式の中でも中相段階に属するものであろう。49～52、Fig.13－53･54は二重口縁の壺である。49は口径18.0cm、胴径25.8cm、器高33.3cmを測る。口縁部は開き、肩部に一条の沈線を施す。外器面は上半部が横ハケ目、下半部が縦ハケ目で調整されている。口縁部から頸部にかけては丁寧にナデられており、下地のハケ目は見られない。内器面は指オサエ、左回りのヘラ削り、右回りのヘラ削り、ナデ調整で仕上げられている。褐色～暗褐色を呈し、胎土は精良である。50は上層から出土したものである。口径は18.0cm、胴径は32.8cm、器高39.0cmを測る。口縁部は直に立ち、下部が凹線状に窪む。51は下層からの出土で、口径31.4cmを測る。直に立つ頸部から口縁部を外傾させ、さらに粘土帯を接合して二重口縁に仕上げている。内外面とも工具及び指ナデで平滑に調整されている。52は中層から出土した大型の壺で、口縁部は直に立つ二重口縁を有し、胴上位で大きく張った器形となる。口径23.0cm、胴径45.8cm、器高52.6cmを測る。褐色からうすい茶褐色を呈し、胎土には石英・長石・金雲母を含む。内外面ともハケ目調整が施され、頸部から上はナデ調整で仕上げられている。内器面には輪積みで成形された粘土接合痕が良く残っている。焼成は良好である。53は口径16.4cm、残高3.15cmで下層から出土している。口縁部は直に立つ頸部から水平に仕上げ、さらに粘土帯を接ぎ足して外傾させる。外面は細かなヘラ磨き、内面は横ハケ目を施した後暗文風のヘラ磨きを加える。淡褐色

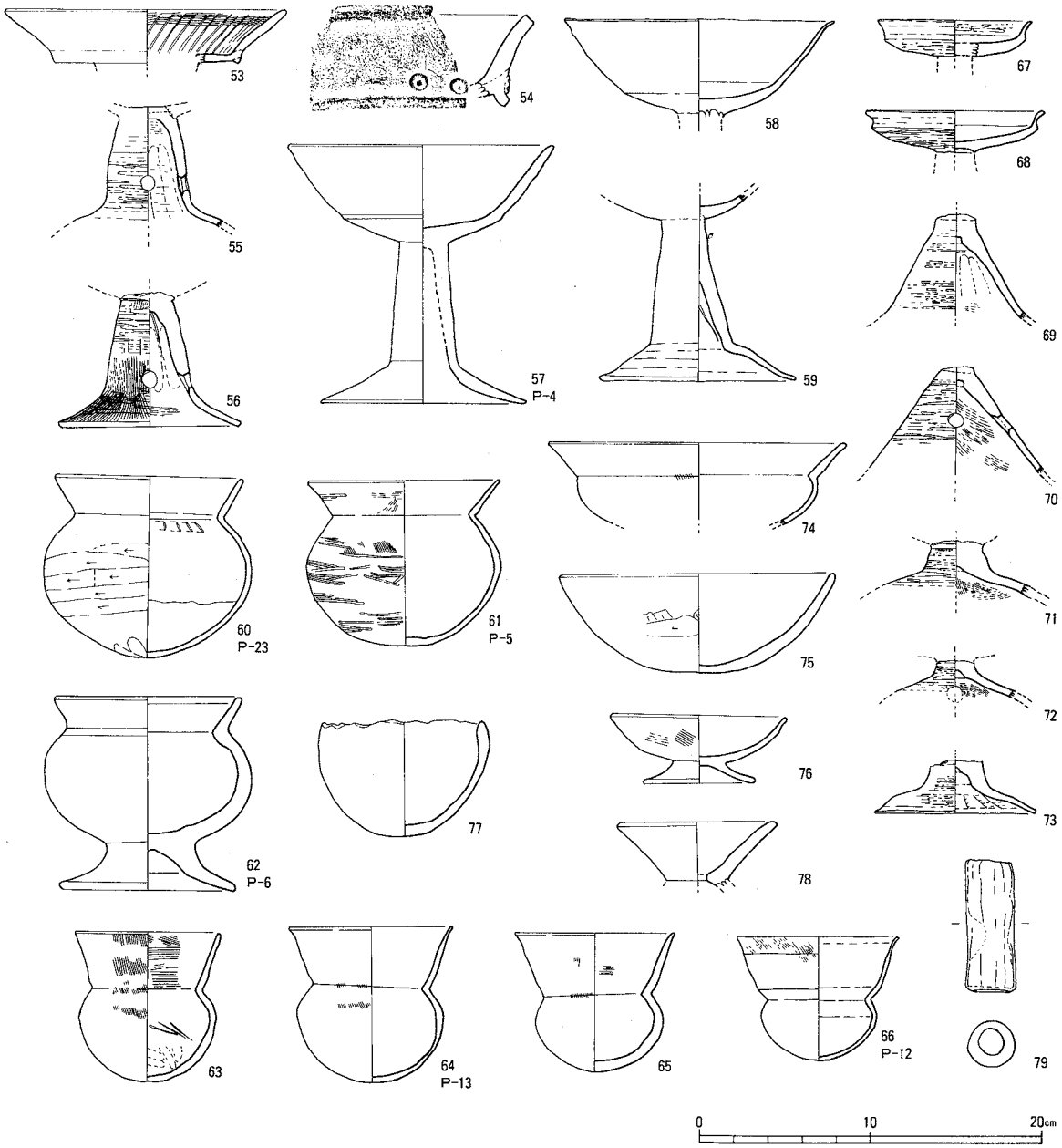


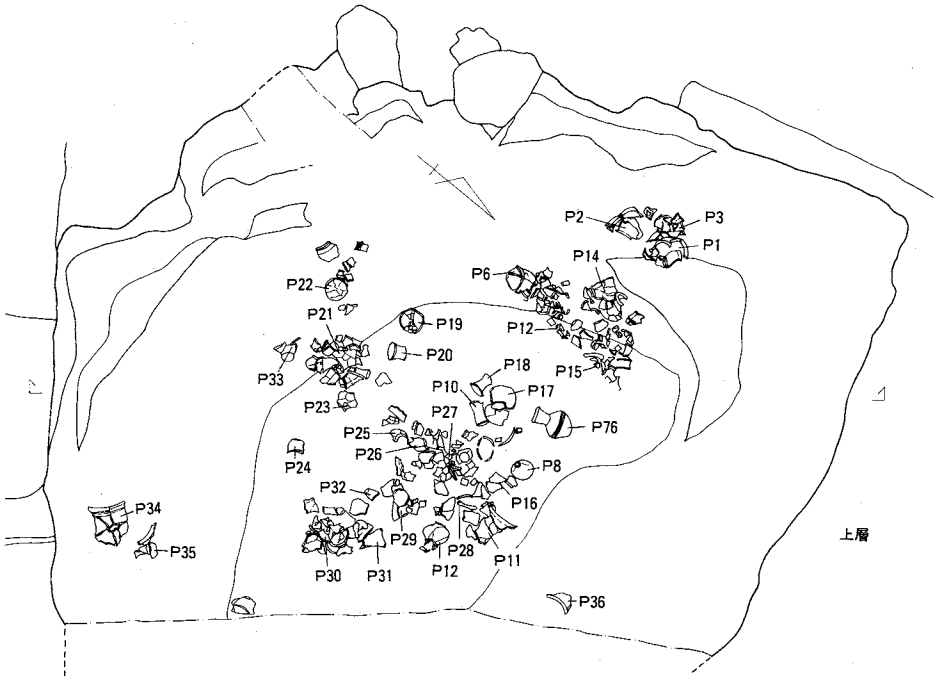
Fig.13　SD04出土遺物実測図(2)(1/4)

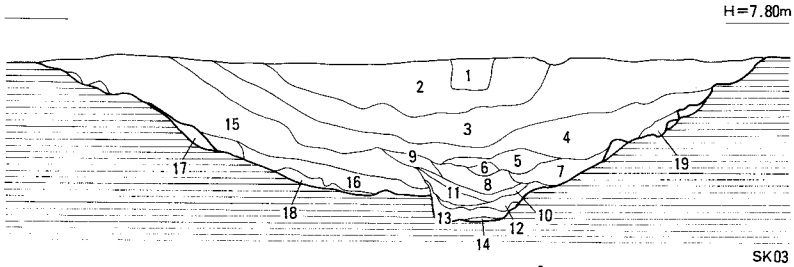
を呈し、胎土は精良、焼成も良好である。54は口縁外面に櫛描波状文を施し、二個一対の円形浮文を竹管状工具で貼り付ける。外面は褐色、内面は暗灰色を呈し、胎土には石英・長石粒の他に閃緑岩なども含む。搬入品であろう。55～59は高坏である。55・56は短脚で筒部にふくらみを持ち、57～59は長脚で脚部が屈折するタイプである。57は口径15.1cm、底径12.0cm、器高15.1cmを測る。坏部はやや屈折して立ち上がる。58は口径15.6cm、59は底径11.4cmを測る。これらは明褐色からうすい赤褐色を呈する。胎土はともに精良である。60・61は丸底壺である。61は口径11.0cm、胴径12.0cm、器高10.5cmを測る。胴部外面にヘラ削りが認められ、内面にはヘラ当て痕が残る。外面は明褐色を呈し胴部下半に黒斑がある。胎土は1～2mm大の石英・長石・金雲母を僅かに含むが精良である。焼成は良好である。61は口径11.2cm、胴径11.3cm、器高9.5cmである。暗灰褐色を呈し、外面にはハケ目と細かなヘラ磨きが観察される。胎土、焼成とも良好である。62は脚台付の壺である。口径10.8cm、胴径11.9cm、底径10.2cm、器高11.3cmを測る。厚ぼったい作りで、外器面は横方向の細かなヘラ研磨が施される。

内外面とも明褐色を呈し、胎土は精良で僅かに石英・長石・金雲母を含む。63～66は小型丸底壺である。63は口径8.4cm、器高8.5cmで外面は縦ハケ目後横方向の細かなヘラ磨き、胴下半は斜め方向のヘラ磨きが加えられる。茶褐色を呈し、胎土は精良である。64は口径9.5cm、器高9.1cmを測り、胴上半から口縁部にかけては横方向のヘラ磨き、胴部はヘラ削りの後横方向のヘラ磨き、胴下半は縦方向のヘラ磨きが加えられる。内外面とも褐色を呈する。65は口径9.2cm、器高8.1cmで褐色を呈し、口縁部から胴上位にかけては縦ハケ後横方向のヘラ磨き、口縁内面は横ハケ後横方向のヘラ磨きが施される。66は扁球形の胴部に屈曲して広がった口縁部を有する。口径9.4cm、器高7.2cmを測る。赤褐色を呈し、全体にナデ調整を加えるが口縁部外面に下地調整のハケ目痕が残る。67～70・78は小型器台である。67は口径8.9cm、68は10.4cmを測る。ともに口縁端部が外方へ伸びる。外面には細かなヘラ磨きが施される。69・70は脚部で外面に横方向の細かなヘラ磨きが加えられている。69は中層、70は下層から出土。71・72は椀状高坏の脚、73は脚台付鉢の脚部である。これらは下層から出土している。外面には細かな横方向の磨きが施される。74は鉢で口径17.4cm、明褐色を呈し口縁部内外面は横方向の細かなヘラ磨き、胴下半はヘラ削りが施されている。下層から出土。75も下層から出土した椀である。口径16.1cm、器高5.8cmを測り、口縁内外面は横ナデ、外面下半はヘラ削りの後ナデ調整、内面はヘラ磨きが施されている。明褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。76は短脚の付いた鉢である。口径10.2cm、底径6.5cm、器高4.1cmを測る。淡褐色を呈し、胎土に石英・長石・金雲母を少量含む。焼成は良好である。外面に横及び斜めのハケ目調整痕が残る。下層からの出土である。77は上層から出土した粗雑な作りの鉢である。口径9.4～10.0cm、器高6.6～6.8cmを測り、底径2.1cmの小さい平底が付く。調整は指オサエの後横方向のナデ、一部ヘラ削りが加えられている。内面は指オサエの後横方向のナデで調整されている。褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。78は小型器台の受部で、口径9.4cm、残高3.8cmを測る。淡灰褐色～褐色を呈し端部に黒斑がある。胎土は精良である。内外面とも器面が荒れて剝落している。部分的に外面のヘラ磨きが確認できる。79は管状土錘である。中層からの出土で径2.7cm、全長6.8cmを測る。褐色～茶褐色を呈し、胎土には石英・長石・金雲母等を多く含む。焼成は良好である。Fig.32－251～255は石器、土製品、鉄器である。255以外は全て弥生時代の混入品である。251はⅠ区下層から出土した石戈である。灰緑色を呈する頁岩製で、残長12.9cm、最大厚1.5cm、茎長1.2cm、孔径0.5cmを測る。先端部及び左側面を破損する。孔は敲打の後穿孔され、全面に調整時の研磨痕が残る。252は中層から出土した石庖丁である。輝緑凝灰岩製で小豆色を呈している。残長5.2cm、刃部には横方向の擦痕が強く残り研ぎ減りが激しい。253は下層から出土した投弾である。全長4.2cm、径2.2cmを測る。褐色を呈し胎土、焼成とも良好である。254は上層から出土した匙形土製品である。残長7.4cm、匙の部分が欠損しており端部に接合痕がみられる。255は不明鉄製品である。Ⅱ区中層出土で、全長3.9cm、頭径2.2cm、軸径1.7cmを測る。弥生時代の混入品か古式土師器に伴うものかは判然としない。SD04出土の土器群は、第21次調査の竪穴住居址から出土した土器群と同時期のものがあり SD04はこれらの集落と関係の深い溝と考えられよう。

(4) 祭祀土坑

SK03 (Fig.14～18・32, PL.3・7)　B－1・2区の調査区東側で検出した大型の土坑である。第21次調査区で出土したSK49の延長部分に当る。確認面の幅は6.1m、長さ4.6m以上、深さ1.1mを測る。第21次調査ではSK48とともに墓地を区画する祭祀土坑と考えられた。出土遺物は弥生中期後半から後期初頭のものが主体をなし、後期前半から中頃のものが少量、最上層で出土している。第50次調査でも同様の遺物が出土しており、同じ結果が得られた。遺物は主に上層及び中層からまとまって出土している。上層には弥生後期の遺物も含まれる。2面に分けて調査したが、祭祀行為を厳密に区分





SK03土層名称

1.撹乱
2.暗茶褐色土(炭化物を多く含む)
3.暗茶褐色粘質土(粒子状のロームを含む)
4.茶褐色土(粒子状のロームをやや多く含む)
5.茶褐色土(やや暗い。小型のロームブロックを含む)
6.茶褐色土(やや暗い)
7.茶褐色土(やや粘質がある)
8.茶褐色粘質土(4cm大のロームブロックを多く含む)
9.茶褐色土(粒子状ロームを多く含む)
10.黒灰色粘質土(ロームブロックを少量含む)
11.黒灰色粘質土(大型のロームブロックが非常に多く含まれる)
12.茶褐色粘質土
13.暗褐色粘質土(ロームブロックと炭化物を含む)
14.汚黄褐色土
15.黒褐色粘質土
16.明茶褐色粘質土(ローム粒子含む)
17.灰褐色土(粘質)
18.黄褐色土と黒灰色土の混合土
19.灰褐色土(ローム粒子を含む)

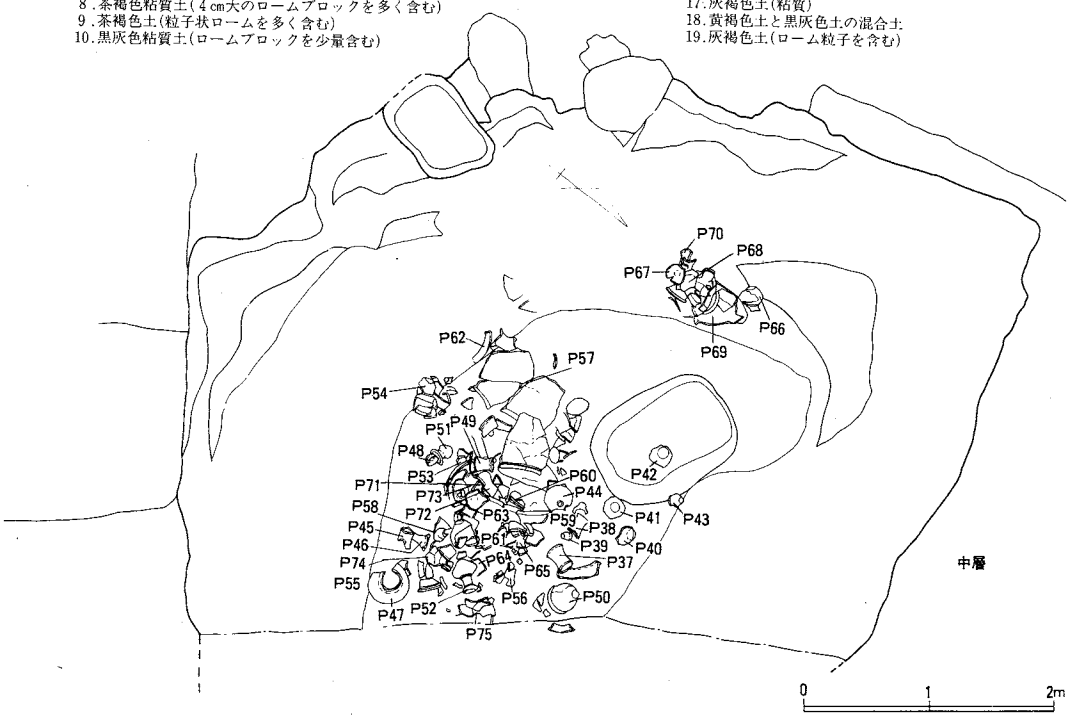


Fig.14　SK03遺物出土状況実測図・土層断面図(1/60)

したものではない。以下、出土遺物について触れてみたい。

Fig.15－80～84　Fig.16－89～95は甕形土器である。80はくの字状口縁の端部を肥厚させ、底部が裾広がりになる甕である。口径30.4cm、器高38.3cm、底径7.8～8.6cmを測る。外面は灰褐色を呈し胴部から底部にかけては暗灰色となる。福岡平野より東の地域に中心を持つ甕であろう。81～83は逆L字もしくはくの字状口縁を有する甕である。81は口径29.5cm、器高34.2cm、82は口径30.2cm、器高34.2cm、83は口径30.1cm、器高33.4cmをそれぞれ測る。褐色から茶褐色を呈し縦方向の粗いハケ目調整が施される。84はくの字状口縁を有し、口縁内面が弯曲する大型の甕である。頸部に三角突帯を一条巡らす。口径43.9cm、残高50.5cmを測る。89は胴部に三角突帯を一条巡らすタイプの甕である。90は口縁部が逆L字状を有し、口縁下に工具による凹線を二条巡らす。91・92は胴部に丸味を持つ甕である。底径は大きく、口縁部は短くくの字状に折れる。福岡平野以南に多くみられる甕である。93は底径がやや大きく、逆L字に近い口縁を有する甕である。下層からの出土である。以上の甕は弥生中期後半から中期末にかけての時期である。94は後期初めに属する甕である。口径16.6cm、器高21.1cmを測り、胴がやや長い。口縁部も強くくの字状に屈曲する。95は口縁下と胴部にコの字状突帯を巡らす甕である。口縁はくの字に折れて肥厚する。胴部の突帯以下は器壁が薄くなって破損しており、下半は不明である。色調は赤褐色～茶褐色を呈し、胎土には石英・長石粒を多く含む。外面には縦ハケ目調整が残る。口縁部に一条、胴部に二条の突帯を有し、突帯以下が無い甕形土器が那珂23次調査の環濠内からも出土している。85～88、96～100は壺形土器である。85は丹塗りの瓢形土器である。口径18.5cm、器高40.0cmを測る。口縁部は鋤先状ではなく広口状を呈する。86は直口状の口縁部に卵形の胴部を有する壺である。口縁部は肥厚し端部を窪む。このタイプの壺は祭祀土器のグループにはよく見受けられ、丹塗りが施されるものもある。87・88は鋤先状口縁を有する壺である。87は丹塗りが施され、口縁端部に刻み目を施す。頸部にはM字状突帯を二条に巡らす。88は頸部に三角突帯を一条巡らす。85～88は中期末に属するものである。96は広口状の口縁を有し、球形の胴部を持つ壺である。口縁部は肥厚し、端部は窪む。頸部に三角突帯、胴中位にM字状突帯を巡らす。口径24.8cm、胴径32.4cm、底径8.5cm、器高37.6cmを測る。底部は特に厚く作る。内外面ともハケ目調整が施されている。後期初頭に属するものであろうか。97は口縁部が外反し、倒卵形の胴部を有する壺である。頸部に三角突帯を一条巡らす。口径20.7cm、胴径29.6cm、底径8.0cm、器高41.7cmを測る。外面に粗いハケ目調整が施される。後期初頭であろう。98・99は複合口縁壺、100は小型壺であろう。98は後期前半、99・100は後期中葉であろう。101は小型の甕、102は鉢である。102は上層からの出土で、底部にやや丸味を持っている。後期中葉に属するものであろう。103～107は器台である。後期初めから中葉のものと考えられる。Fig.17－108・109は袋状口縁壺である。108は口径9.65cm、口縁部最大径12.7cm、胴径21.1cm、底径7.4cm、器高24.2cmを測る。口縁下にM字状突帯二条、肩部に二条それぞれ施す。109は口縁部を欠失する。外面には丹塗り磨研が施されている。110は単純口縁の壺である。口縁端部は内側に肥厚させ、口縁部に焼成前の穿孔を二孔施す。外面には丹塗り磨研が施される。111～113は無頸壺である。111は口径16.8cm、器高14.6cmを測る。丹塗り磨研が施される。108～111は中期末に属するものである。112・113は上層出土で、口縁部がくの字状に立ち気味になり、器高がやや高くなっている。後期初頭に下るものであろう。114は口縁が内弯する鉢である。口縁端部はやや肥厚する。115～119は小型の壺形土器である。115は鋤先状口縁を有し、口縁内側は肥厚させる。頸部と胴部の境には三角突帯を巡らす。116・119は頸部と胴部との境が不明瞭な小型壺である。117は口縁端部が水平に屈折して伸び、118は短く曲る。胴部はともに丸味を有する。これらの小型壺は中期末に含まれるものと考えてよかろう。120～122は器台である。120・121は外面を縦ハケ目で調整し、内面は横ハケ目を施す。121は口縁端部をやや窪

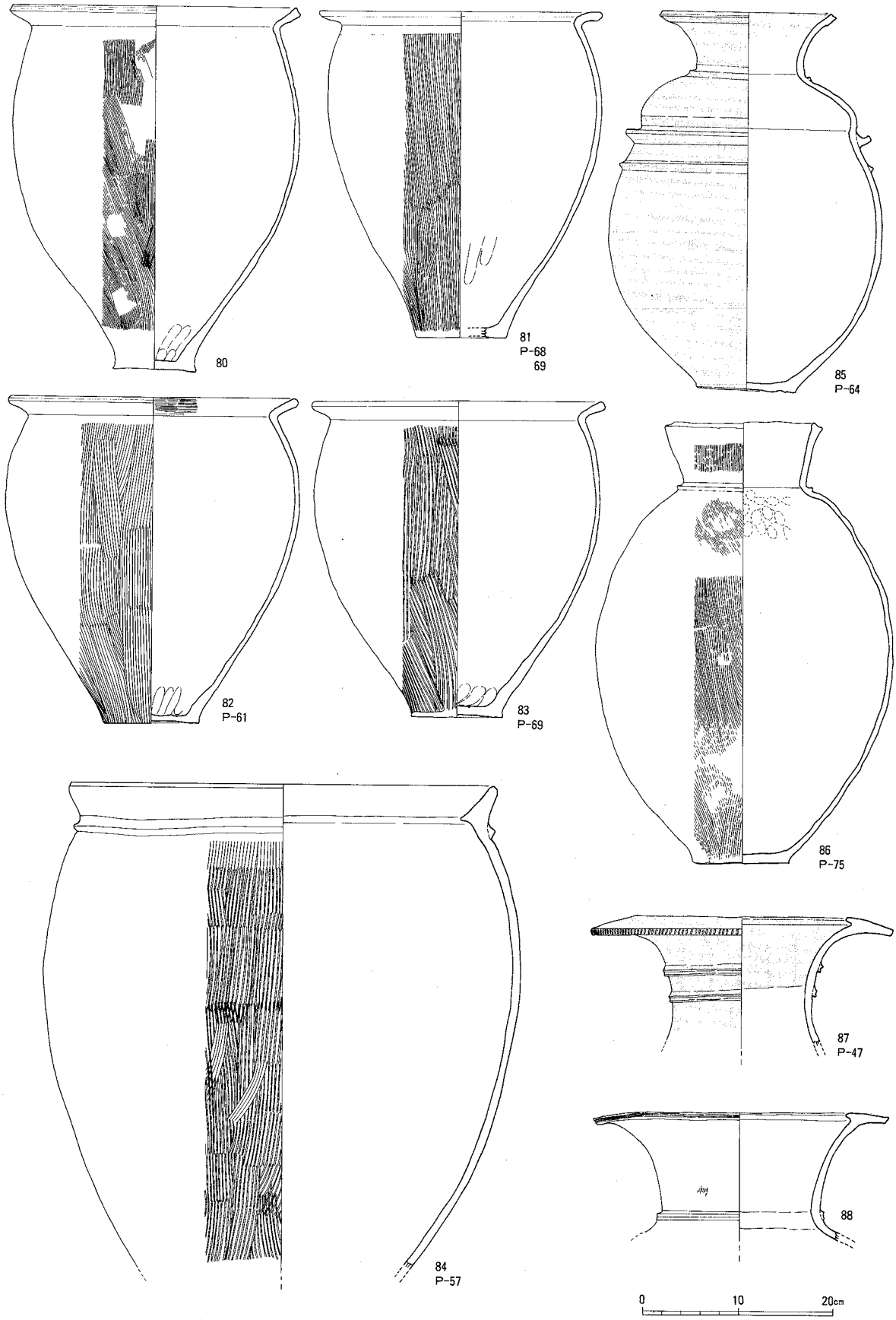


Fig.15　SK03出土遺物実測図(1)(1/6)

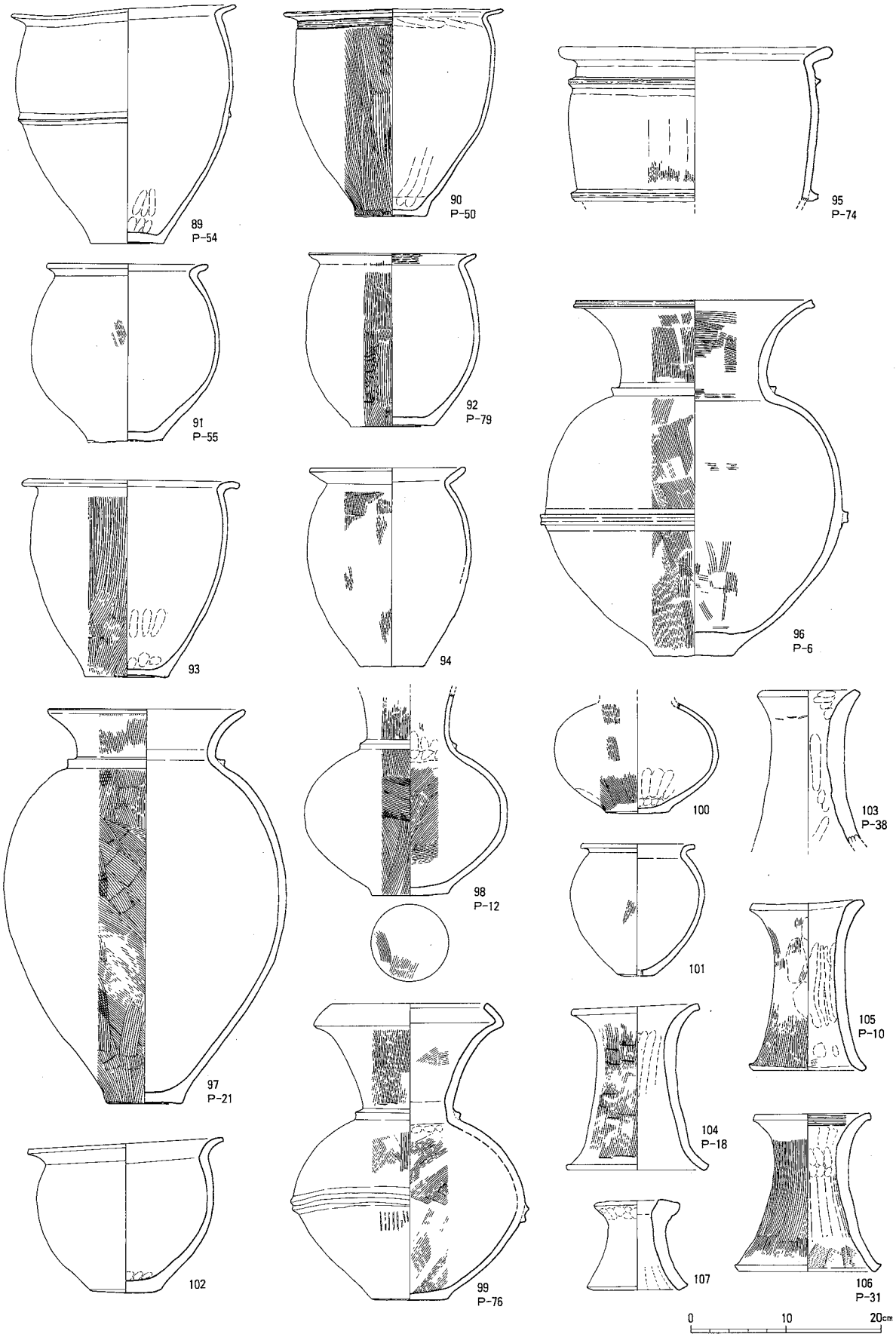


Fig.16　SK03出土遺物実測図(2)(1/6)

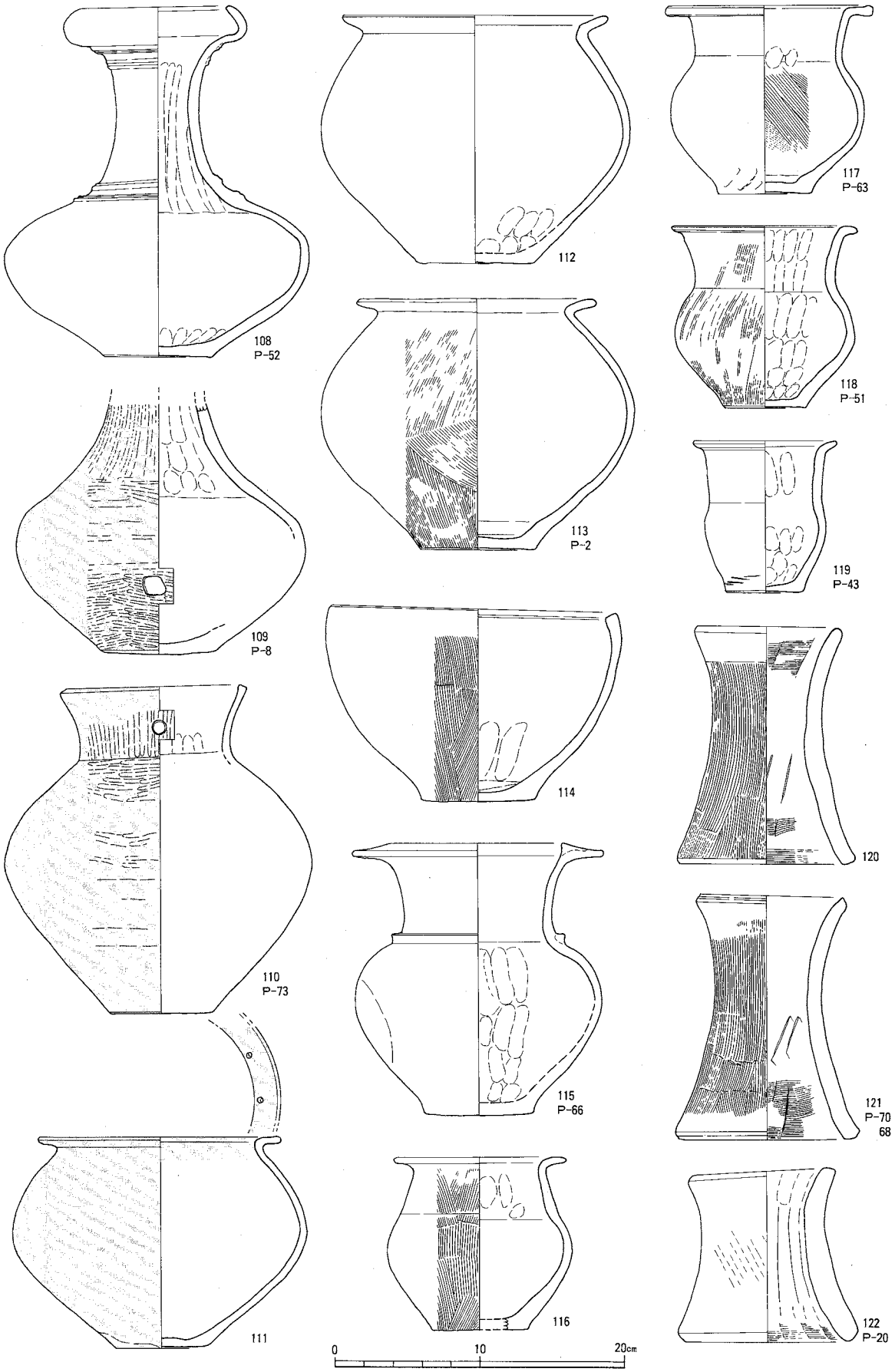


Fig.17　SK03出土遺物実測図(3)(1/4)

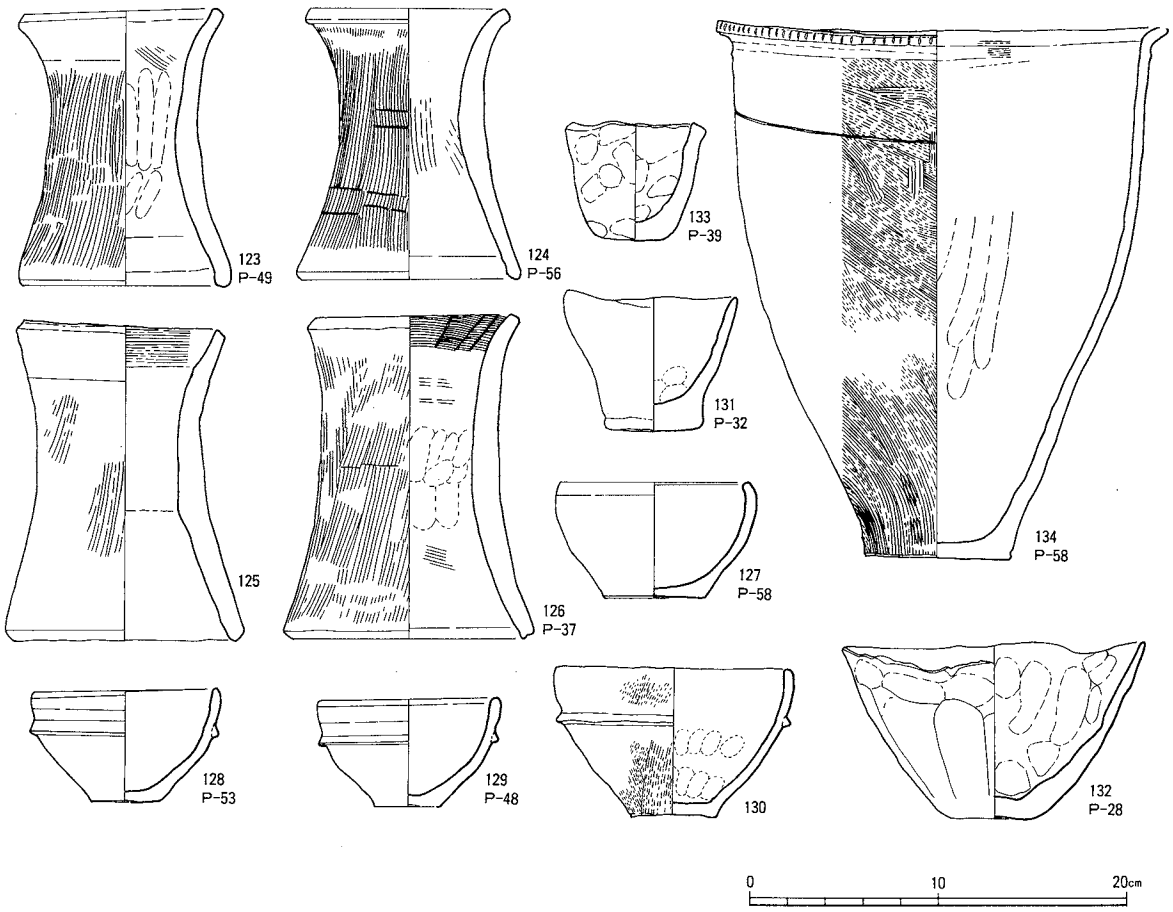


Fig.18　SK03出土遺物実測図(4)(1/4)

ませる。122は後期に属するものであろうか。Fig.18－123～126は中期末に属する器台である。127～133は小型の鉢形土器である。127は口縁部が内弯する鉢形、128～130は口縁部がやや内弯し、胴部に三角突帯を施す鉢形土器である。これらは中期末に属すると考えられるが、131～133は時期的にやや新しいと考えられる。131平底で単純に開く口縁部を有し、132・133は手捏ねの粗雑な作りの鉢である。134はSK03とは切り合い関係にある下の土坑から出土した板付II式の甕である。口径23.7cm、底径7.7cm、器高28.9cmを測る。口縁部は短く外反し、端部全面に刻目を施す。外面には斜め方向のハケ目調整が施され、口縁下に一条の沈線が巡る。板付II式の中でも古相に属するものではなかろうか。Fig.32－243～249はSK03から出土した石器、土製品、鉄器である。243は上層から出土した鉄鏃である。長さ5.1cm、幅2.6cm、厚さ0.3cmを測る。三角形を呈し基部に抉りが入る。全体に銹が厚く付着しており断面の形状ははっきりしない。弥生中期末か後期初頭に属すると考えられる。244は滑石製の紡錘車(紡輪)である。復元径6.0cm、厚さ0.5cmを測る。暗灰緑色を呈し平滑に仕上げられている。最上層からの出土で新しくみれば後期前半から中葉の時期であろう。245は上層から出土した石剣である。残長7.2cm、最大幅3.6cm、最大厚1.0cm、茎長1.0cm、茎幅2.3cm、茎厚0.9cmを測る。灰緑色の頁岩製で縦方向に脈が入る。両端刃部は面取りされ刃は付いていない。両面の鎬付近には調整の研磨痕が観察され、粗調整の剥離痕が残っている部分がある。身の大部分は欠損している。弥生中期の後半代に属するものであろうか。246は中層出土の石庖丁である。残長8.0cm、最大幅4.1cm、厚さ0.8cmを測る。石材は小豆色をした輝緑凝灰岩である。刃部裏面に使用痕が観察され左手で使用されたことが分かる。247は局部磨製石斧である。最上層から出土している。玄武岩製で両面から調整剥離を加えて整形し、下半部に

研磨を加え刃部を作出している。磨製石斧としての機能が終焉した後は敲打器に転用されている。全長11.0cm、幅4.8cm、厚さ2.9cmを測る。**248**は丹塗りの竿頭形土製品である。近年発見例が増加しており、環濠などから他の祭祀土器と共に出土する例が多い。頭部径6.7cm、残高7.7cm、中央孔径0.4cmを測る。外面には丹塗り磨研が施される。頂部にはあらかじめ沈線で十字に割り付け、その間にさらに1本ずつの沈線を加えて都合8本の沈線で文様を構成している。内面にはシボリ痕がみられる。胎土は精良で1mm前後の石英・長石粒を少量含む。断面は褐色を呈し、頭部に黒斑がある。焼成は良好である。祭祀土器のひとつで、原ノ述遺跡から出土したものは筒部下半がラッパ状に開く形態を有する。使用方法はいまのところ判然としない。**249**は投弾である。上層から出土したもので、全長3.9cm、径2.2cmを測る。褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。SK03出土土器は祭祀に使用された完形の土器が中心となるが、第21次調査区のように丹塗りの土器はあまり多くはない。特に高坏は目立たなかった。上層出土の遺物は祭祀行為が廃絶したあと流れ込んだものも多く石器などの生活遺物がかなり含まれていた。

2　B区の調査

B区はA区の東側に位置し、大正時代に建てられた赤レンガ建物の部分にあたる。既設建物でかなり破壊されていたが、深い井戸や部分的に削平が少なかった部分から井戸15基、竪穴住居址3軒、溝2条、土坑5基が検出された。また南端部では谷の落ち際が確認され、弥生時代から中世にわたる包含層が形成されており多量の遺物が出土している。

(1)　竪穴住居址

SC16（Fig.20, PL.4）　A・B－5・6区で検出した方形の竪穴住居址である。SC18の東側に位置し、SC18を切っている。大部分は削平されて全体の様子はつかめなかった。確認した規模は4.75m×2.85m以上である。須恵器の坏・甕、土師器の甕、滑石製の臼玉などが出土している。一部奈良時代から平安時代の須恵器甕も出土しているが、これは柱穴などの切り合いで混入したものであろう。破片が小さいので細かい時期を決め難いが、坏からみて6世紀後半代に属すると考えられる。

SC17（Fig.20, PL.4）　A－5・6区、SC16の西側に位置し、SC18を切っている。4.6m×4.25m以上の規模になるとみられる。出土遺物は須恵IIIb、IVaの坏身・蓋、土師器の甑、甕などが出土している。6世紀後半から末にかけての住居址であろう。

SC18（Fig.20・21・31, PL.4）　A・B－5・6区に位置し、北側をSK20、南側をSC17、東側をSC16に切られている。プランは長方形を呈し、東西3.80m、南北3.0mを測る。北側に張り出してカマドが付設され、南側には壁溝が部分的に巡る。須恵IIbの坏身・坏蓋、甕、土師器の甕、甑、鉢、高坏などが出土している。坏蓋は綾線が強く残り段を有する。坏身の受部立ち上がりも高い。土師質の甕の中には丸底で口縁部が短く外反し、胴部にタタキを施すものが存在する。Fig.31－**235**はカマド部分で倒立して出土した土師質の高坏である。支脚に使用されていたものであろうか。口径17.1cm、残高14.2cmを測り、坏部は椀形に立ち上がる。明褐色を呈し、胎土には2～3mm大の石英・長石粒、金雲母の微粒子をやや多く含む。内外面とも器表面が荒れて剝落している。土師質の高坏ではあるが、ロクロ使用で作りは須恵器的である。SC18は出土遺物から5世紀末から6世紀初頭に位置づけられよう。

(2)　井戸

SE01（Fig.22・25・33, PL.4・8）　C－1区西側の中央付近で検出したもので、径1.5mの略円形を呈する井戸である。深さ4.15mを測り、検出面から1.75～1.85mの所でやや抉れ、この部分が鳥栖ロ

ームと八女粘土との境界となる。下端は長径0.55m、短径0.32mの楕円形を呈し深く窪む。南側の壁が一部約0.15m窪んでおりこの部分が汲み上げ口かと思われる。土師器甕・坏・カマド、須恵器甕、曲物、櫛などが出土している。Fig.25－135～138は土師器甕である。外面は粗いハケ目調整、内面は粗いヘラ削りが施される。138は外面のハケ目をナデ消している。139・140は土師器の鉢形土器である。140には両側に把手が付く。141～151は土師器の埦・坏・皿である。141～143は高台付の埦である。144～148は坏、149～151は皿である。坏や皿の底面はヘラ切り放しで板目圧痕が付くものがある。Fig.33－259～263は曲物及び曲物の底板、264は櫛である。259の底径は21cm、底板の厚さは0.7cmを測る。SE01からは8点の曲物及び底板が出土している。SE01は出土遺物から8世紀末～9世紀初頭の時期であろう。

SE02（Fig.22・25～27・33, PL.4・8）　B・C－1・2区で検出した大型の井戸である。長径4.7m、短径4.1mの楕円形を呈し、深さは3.6mである。検出面より－1.1～1.4mで八女粘土層に達し、－2.50～2.85mで溶結凝灰岩の灰色風化層に至る。底はさらに1.05m掘り込まれている。東側に四段、西側に一段のテラスを有する。下端は長径0.65m、短径0.55mの楕円形を呈する。遺物は6世紀後半から7世紀一杯にかけて多量に出土している。Fig.25－152～157は上層から出土した須恵器坏蓋、皿である。7世紀中葉から末葉に属し、この時期には井戸は完全に埋まっていたことを示している。158～164は須恵器坏身・坏蓋である。158は上層、159は下層出土である。他は中層から出土したものである。6世紀末から7世紀初めの時期であろう。Fig.26－165～169は須恵器坏身である。170・171は高坏で、170は無蓋、171は有蓋の高坏である。171は長脚で脚部に透しが入る。172は弥生後期の甕で混入品であろう。173は土師器の甕である。中層から出土している。174・175は須恵器の壺である。174は口縁端部を外側に折り曲げる。175には焼台として使用された須恵甕片が溶着している。176、Fig.27－177は提瓶である。176には退化した把手が2箇所付く。ともに下層からの出土である。178は下層出土の須恵器の甕、179は下層出土の脚台付壺である。180～182は上層及び中層から出土した円筒埴輪である。パンケース1箱以上出土している。180は口径36cmに復元でき、口縁部にヘラ描きの鋸歯文を施す。181はかなり大型に復元できる。182は底部である。底径34.9cmを測る。器色は茶褐色を呈するものが多く、外面は主に縦方向の粗いハケ目調整が施される。タガは低いものとやや高いものが存在する。隣接の剣塚古墳、剣塚北古墳の埴輪とも異なっており、近くに別の前方後円墳が存在した可能性がある。Fig.33－265は木製の編錘である。下層からの出土で全長16.8cm、径6.1cmを測る。中央部は径2.5cmまで削り込んでいる。SE02は下層出土の遺物から6世紀後半～末葉に位置づけられよう。

SE03（Fig.19・22, PL.5）　D－2区で検出した径0.9mの略円形を呈する井戸である。深さ1.32m、中央部がさらに不整形に10cm程窪む。完形の遺物は出土していないが、破片としては弥生中期末の甕、丹塗り高坏、支脚、丹塗り無頸壺蓋、鋤先状口縁の壺などが出土している。弥生中期末。

SE04（Fig.23・28・33, PL.5・8）　E－2区で検出した径1.2mの円形を呈する井戸である。深さは2.65mを測り、下端付近で八女粘土層に達する。上面は撹乱によって削平されている。井戸底から遺物がまとまって出土した。Fig.28はSE04から出土した遺物群である。183は口縁部を欠失した甕である。胴部に焼成後の穿孔が認められる。184・185は甕である。184は口径15.4cm、器高15.1cmを測る。非常に精良な胎土を持ち、外面は淡灰褐色を呈する。外面には幅2cm前後のヘラでナデた様な稜線がうすく確認できる。また、器面全体に長さ1.5cm前後のヘラ状工具の端部を押し当てた様な圧痕が付く。この圧痕は右上りとなる。内面は4本の指で底部から口縁部に向ってナデ上げられており稜線が残る。作りは粗雑で器形が歪つである。186～190は口縁部に焼成前の穿孔を2孔施した壺形土器である。口縁部を肥厚させ端部を窪ませるもの、端部を平縁に納めるもの、口縁端部を丸く仕上げるものなどがある。186は丹塗りが施され、190は焼成後の穿孔を加え合計3孔としている。190は器形も変わ

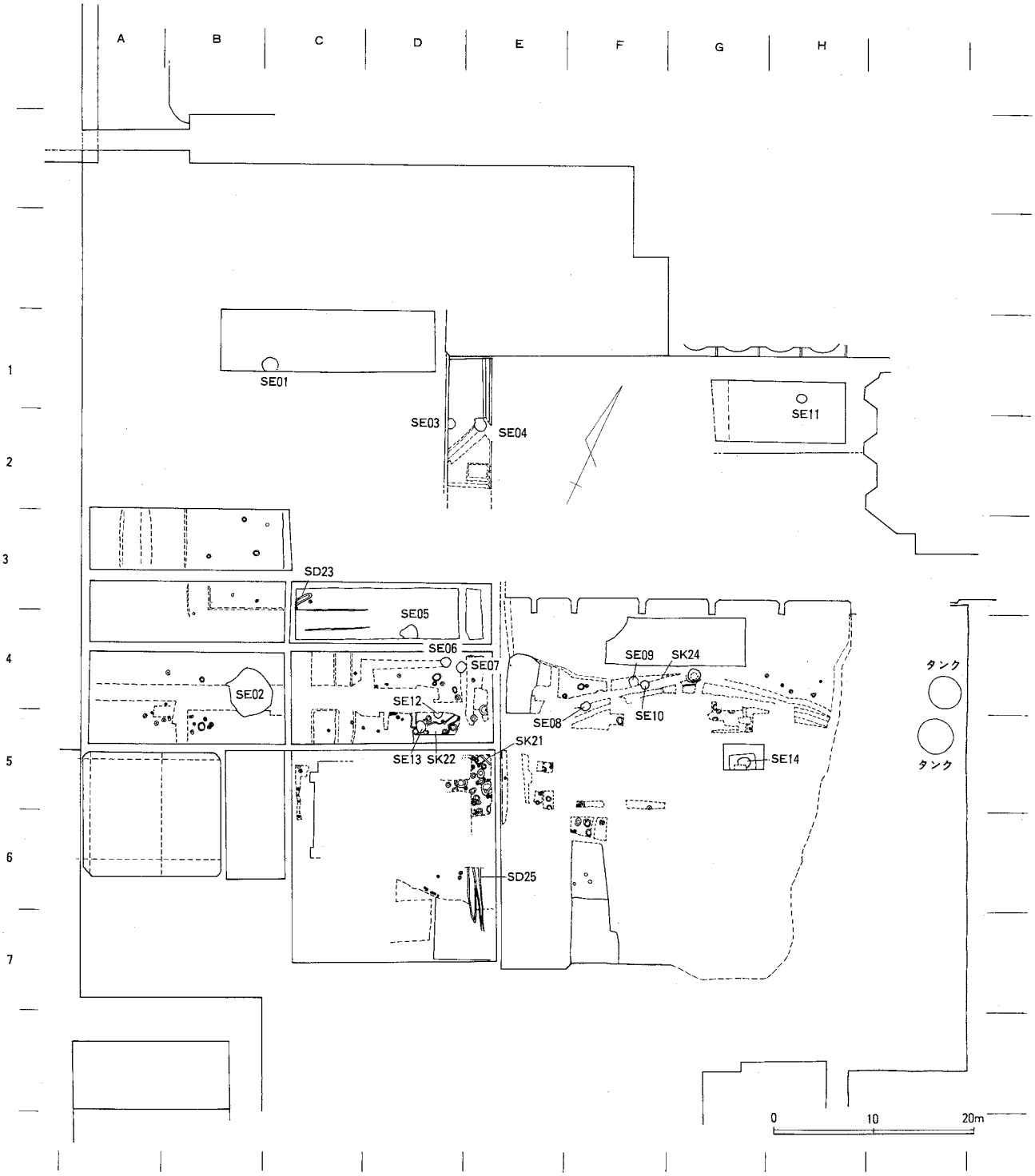


Fig.19　B区遺構全体図(1/600)

っており、頸部に三角突帯を施す。191～194は丹塗り研磨の袋状口縁壺である。192と194には口縁下に三角突帯を施している。193は胴部がやや角張っている。Fig.33－266・267は出土木製品である。266は平鍬で、全長30.1cm、幅11.8cm、最大厚2.4cmを測る。柄穴は方形で、柄穴の部分が一段高くなる。福岡平野ではあまり類例の多くない平鍬である。267は杓文字である。残長29.0cm、最大幅4.4cmを測り、先端部は破損している。これらの材については未鑑定である。SE04からは弥生中期末の遺物群が一括して出土しており、井戸祭祀に使用されたものであろう。

SE05（Fig.23・29・32・33, PL.5・8）　D－4区に位置し、径1.65×1.5m以上の円形井戸である。深さは2.9mで、－2.75～2.65mで下端に達し、この部分が八女粘土との境になる。最深部はさらに

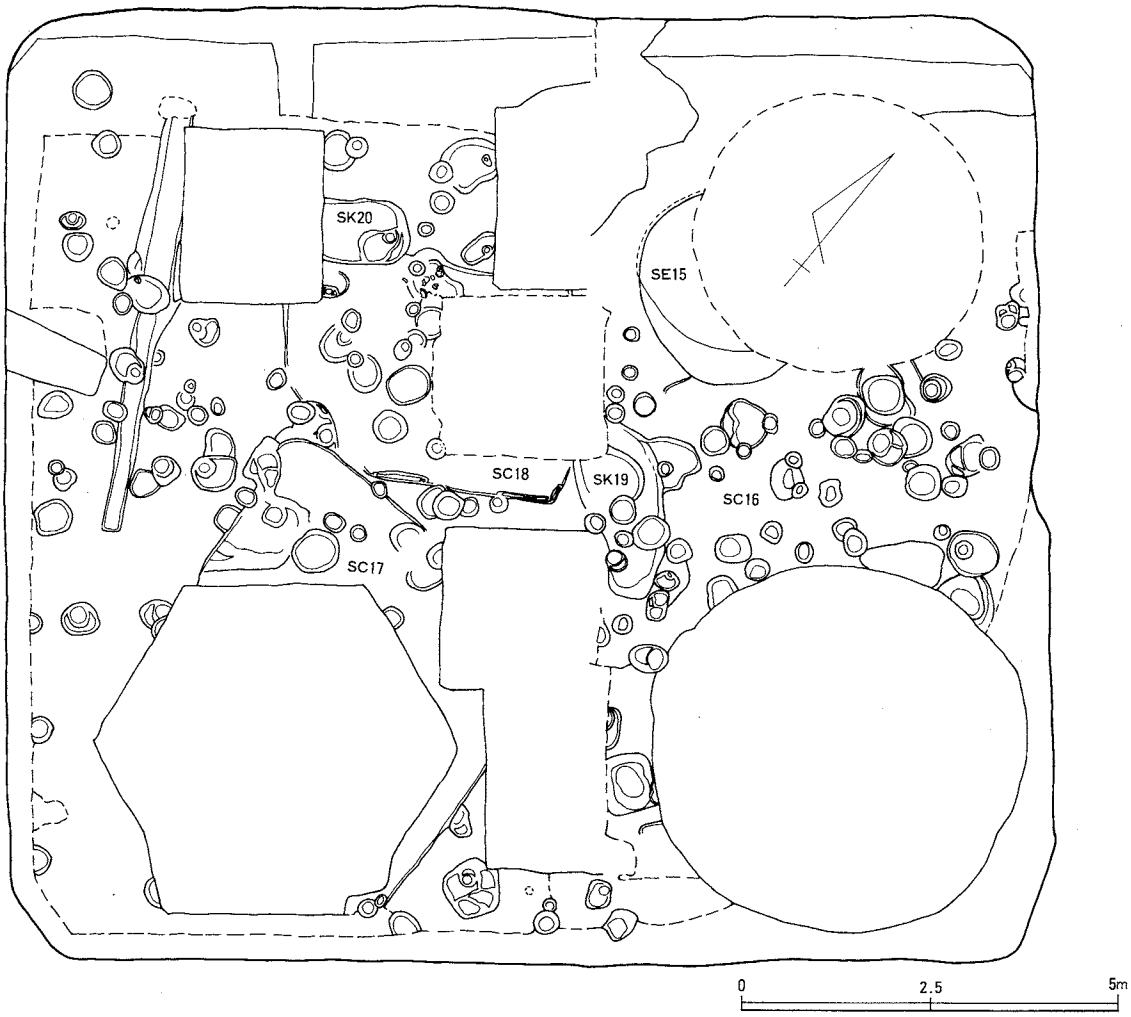


Fig.20　A・B－5・6区遺構配置図(1/100)

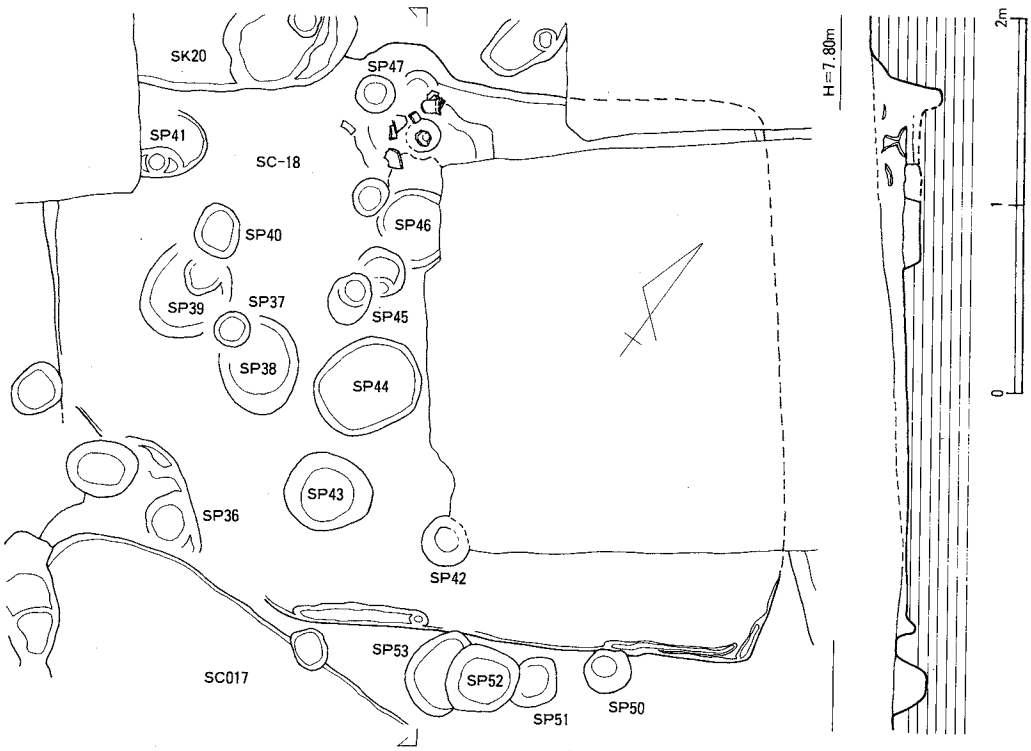
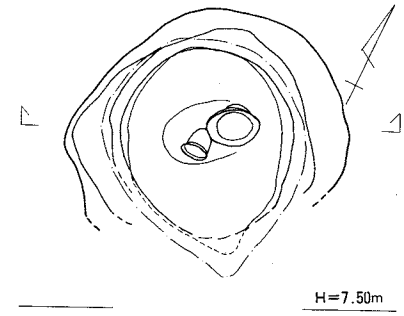
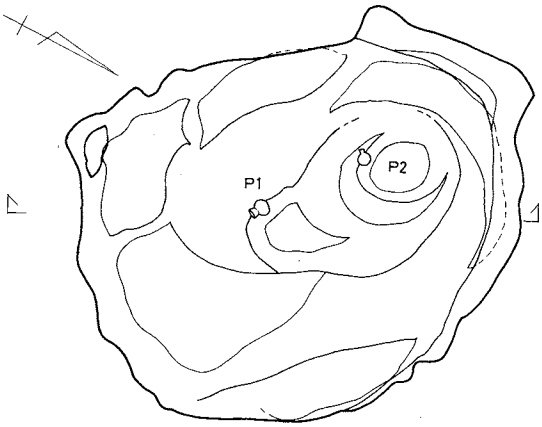
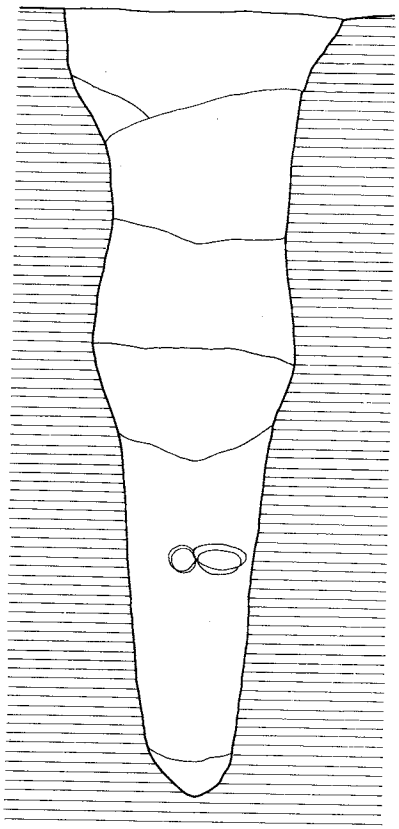
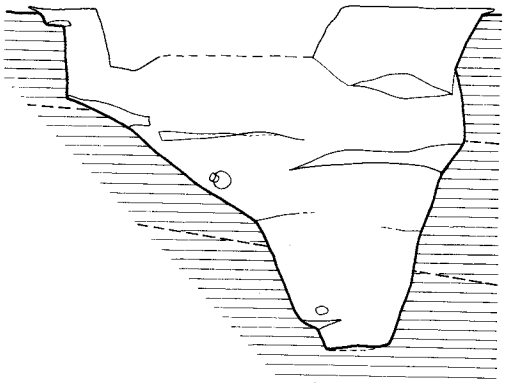


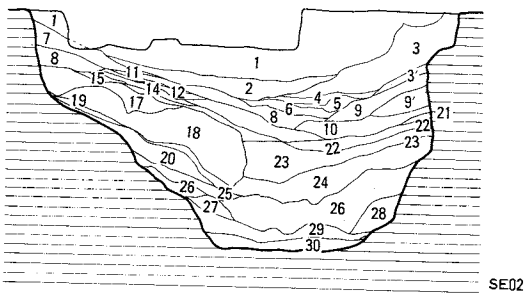
Fig.21　SC18遺構実測図(1/40)

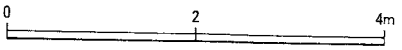


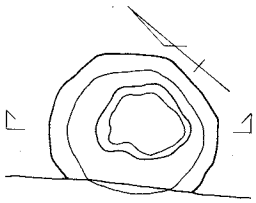


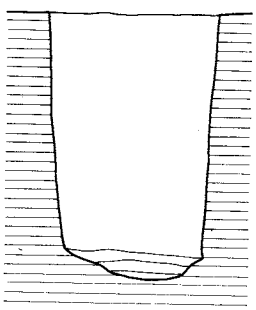












SE02土層名称

1.暗茶褐色粘質土
2.暗茶褐色粘質土
　(1層よりやや明るい。粒子状のロームを少量含む)
3.茶褐色粘質土(粒子状のロームをやや多く含む)
3.3層類似層(ややローム粒大型)
4.茶褐色粘質土
5.茶褐色粘質土(ロームブロックを多く含む)
6.明茶褐色粘質土
7.灰褐色粘質土(ローム小ブロック多く含む)
8.明茶褐色粘質土(ローム粒子　炭化物少量含む)
9.明灰褐色粘質土(3~5cmのロームブロック多い)
9.9層類似層(ロームブロック小型化する)
10.明灰褐色粘質土
11.ローム再堆積層
12.茶褐色土
13.淡黒灰色粘質土(下層にロームブロック集中)
14.ローム再堆積層
15.黒灰色粘質土(粒子状ローム少量含む)
16.黒灰色粘質土
17.明茶褐色粘質土(8層に類似する　ややローム多い)
18.灰褐色土(大型ロームブロック大半をしめる)
19.黒灰色粘質土(トスローム・八女粘土ブロック含む)
20.黒灰色粘質土(八女粘土ブロック少量含む)
21.灰褐色粘質土(ローム及び黒色土ブロック含む)
22.明灰褐色粘質土(ローム粒子多く含む)
23.粒子状の灰褐色土・黒灰色土・ローム混合層
24.黄灰色土(地山ロームの崩落土)
25.灰褐色粘土(ローム及び八女粘土ブロックを含む)
26.トスローム再堆積土
27.灰褐色粘土
　(トスローム・八女粘土・黒色土ブロックを含む)
28.青灰色粘質土(くすんでいる)
29.灰色粘質土(八女粘土・黒色土ブロックを含む)
30.灰色粘質土(八女粘土・トスロームブロックを含む)

Fig.22　井戸遺構実測図(1)(1/40・1/80)

0.2m窪む。南西部がやや抉れており汲み上げ部と考えられる。Fig.29－195～202が出土遺物である。195は下層から出土した土師器甕である。外面には粗いハケ目調整が施され、内面には粗いヘラ削りで調整されている。196は上層から出土した内黒の土師器椀である。井戸の時期のものではない。197は高台付の椀である。198～201は土師器坏である。底面はヘラ切り放しである。202は須恵器の坏蓋である。口径16.5cm、器高2.1cmを測る。色調は青灰色を呈する。Fig.32－256は角釘と考えられる。残長6.5cm、釘身断面は0.5×0.5cmである。全体に厚く銹が覆っており全体の様子は分らない。Fig.33－268・269は出土木製品である。269は曲物で底板と本体の一部が残っている。底部と本体は桜の皮で直接四箇所綴じている。底径16.4cm、底板の厚さ0.5cmである。269は櫛である。残長7.5cm、高さ3.9cm、厚さ1.0cmを測る。梳櫛であろう。SE05は8世紀後半～9世紀初頭の時期に属するとみられる。

SE06（Fig.23・33）　D－4区、SE07の西で検出した径0.95mの略円形を呈する井戸である。深さは0.45mで比較的浅い。弥生土器片と須恵器の高坏片が出土している。時期は確定し難い。Fig.33－270は木製の柄である。全長35.7cm、片面の大部分は破損している。先端近くの断面径は2.0×2.2cmである。基部には径3mmの穿孔が施されている。材質・用途は今のところ分らない。

SE07（Fig.23, PL.5）　D・E－4区に位置し、径1.1m、深さ1.35mを測る。－0.85～0.95m付近で壁が抉れている。八女粘土層まで到達していない井戸である。東側は溝状の撹乱で切られている。弥生中期末の壺、甕片が出土している。時期も中期末と考えて差しつかえなかろう。

SE08（Fig.23, PL.6）　F－4・5区に位置し、0.85×0.9mを測る略方形の井戸である。深さは0.95mを測る。西側は撹乱によって切られている。井戸底から潰れた状態で甕の下半部が2個体分出土している。底面が平底からやや丸味を持つ底部へと変化しているので後期中頃に位置づけられる。

SE09（Fig.23）　F－4区で検出した0.9×0.95mの略円形を呈する遺構である。深さ0.4mで比較的浅く、井戸かどうか分らない。遺物は全く出土していない。

SE10（Fig.23・29, 6）　F－4区で検出した径0.87m、深さ0.92mを測る円形の井戸である。南側半分以上は撹乱によって削平されている。井戸底から小型の直口壺が出土している。Fig.29－203は口径7.6cm、胴径13.8cm、底径4.5cm、器高15.45cmを測る。外面は茶褐色を呈し、胎土には2～4mm大の石英・長石粒を多く含む。底部にはやや丸味を持つ。後期中葉に属するものであろう。

SE11（Fig.23・29・30, PL.6・8）　H－1区に位置し、径0.92m、深さ2.75mの略円形を呈する井戸である。井戸底から遺物がまとまって出土している。Fig.29－204～212は甕形土器である。204は口縁部がくの字状を呈し、胴が張った甕である。206～208も胴部に丸味を持つ。205・209はやや胴の長いプロポーションを有する。外面は縦ハケ目、内面はナデかハケ目調整が施される。207は最下層から出土した甕で、胴部に編み籠の痕跡が残っている。口径17.6cm、胴径17.6cm、底径8.1cm、器高16.7cmを測る。胎土には石英・長石粒を多く含む。外面は褐色を呈し、焼成は良好である。編み籠の痕跡は幅0.5～1cm幅で黒ずんでいる。Fig.30－213は丹塗りの壺形土器である。口縁部は緩やかに外反する。214は頸部に焼成前の穿孔がある直口の壺である。215は口縁部がやや内弯する鉢形土器である。216は瓢形の壺である。口縁部は欠失している。頸部と肩部の境に三角突帯を一条巡らし、胴部にもやや大きめの三角突帯を一条巡らす。壺部と甕部との境が不明瞭な器形である。外面は粗いハケ目調整が加えられている。217～220は袋状口縁壺である。217は頸部が大きく胴も張っている。口縁下に三角突帯を施し、外面は丹塗り磨研が加えられている。218も丹塗り磨研が施されている。219は丹塗りが加えられていない。220は口縁部がやや立ち、胴部があまり張らない袋状口縁壺である。口縁下に三角突帯を一条巡らす。外面は粗いタテ方向のハケ目調整の後、胴下半部を除いて丹塗りが施されている。袋状口縁壺の中では新しい様相を示している。SE11の土器群は弥生中期末でも新しい段階の土器群と

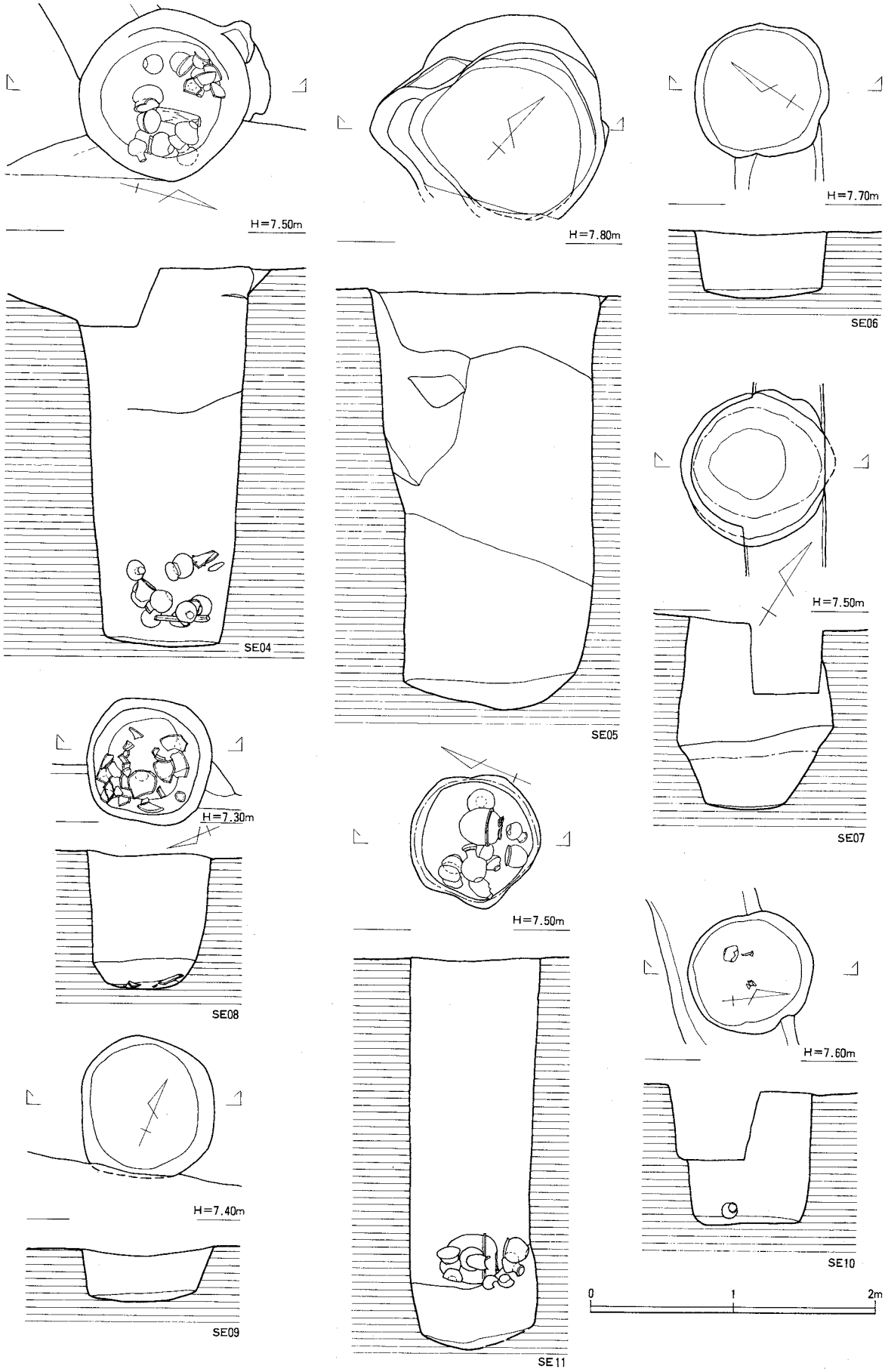


Fig.23　井戸遺構実測図(2)（1/40）

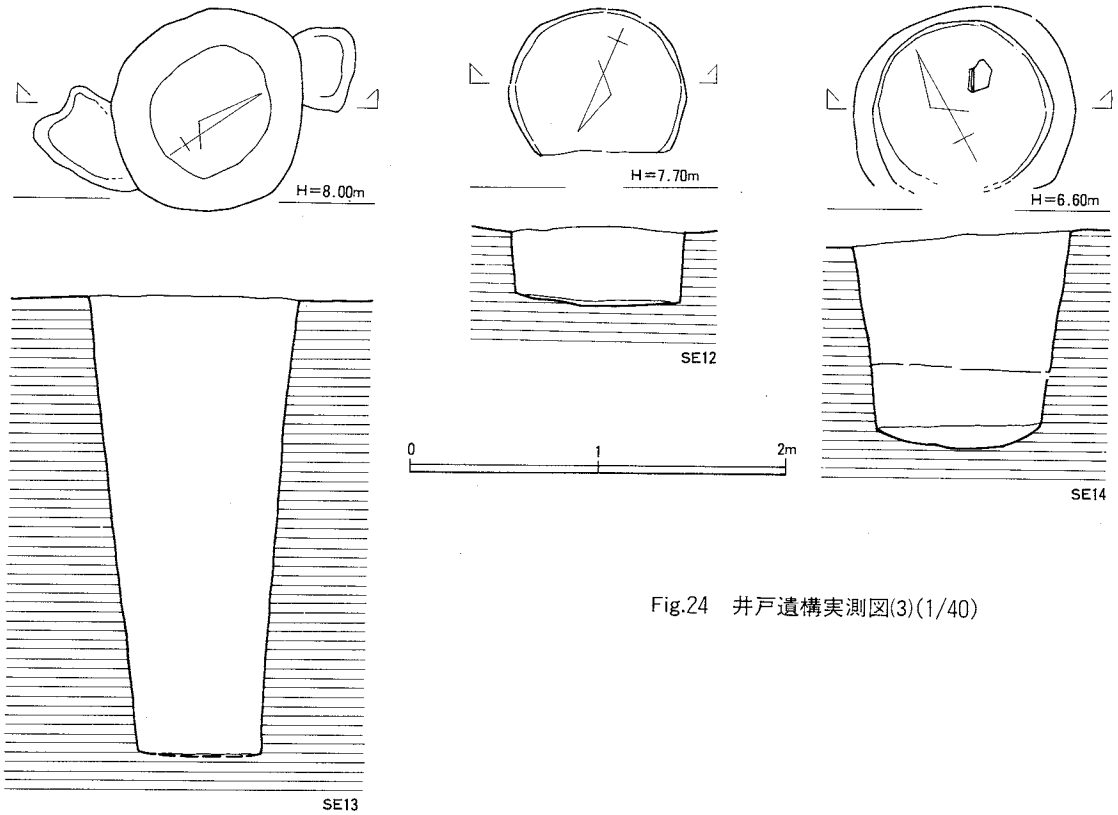


Fig.24　井戸遺構実測図(3)(1/40)

考えられる。

SE12 (Fig.24)　D－5区に位置し、径0.94m、深さ0.42mの円形を呈する小型の井戸である。北側は撹乱によって一部壊されている。比較的浅いため井戸ではない可能性もある。遺物は弥生土器片が少量出土しているに過ぎない。

SE13 (Fig.24・30・31, PL.6・8)　D－5区、SE12の南側に位置し、長径1.12m、短径1.02mの楕円形を呈する井戸である。深さは2.44mを測る。Fig.30－**221**～**223**は甕形土器である。**221**には丹塗りが施される。**224**は無頸壺の蓋である。口径19.7cm、器高4.6cmを測る。外器面には丹塗り磨研が施される。**226**・**227**は丹塗りの袋状口縁壺の胴下半、**227**は丹塗りの鋤先状口縁壺の口縁部である。Fig.31－**228**は多重のM字状突帯を施す壺胴部である。外面には丹塗りが加えられている。**229**は丹塗りの高坏脚部である。**230**は無頸壺である。胴が張り丸味を持っている。外面に丹塗りは施されていない。SE13の出土土器は各器種が揃っている割には完形が少ない。土器の形式からは弥生中期末に属するものである。

SE14 (Fig.24・31, PL.6)　D－5区に位置し、径1.17m、深さ1.09mを測る略円形の井戸である。南西部は撹乱によって破壊されている。土師器の坏、平行タタキの丸瓦、須恵器の甕、高坏などが出土している。Fig.31－**231**は土師器の坏である。口径9.4cm、底径6.7cm、器高3.8cmを測る。底面はヘラ切りで、ヘラによるナデがみられる。外面底部付近には3本の細い沈線が巡る。SE14は平安時代前期に属する井戸であろう。

SE15 (Fig.20)　B－5区、SC18の北に位置する井戸である。長径2.55m、短径1.5m以上、深さ1.

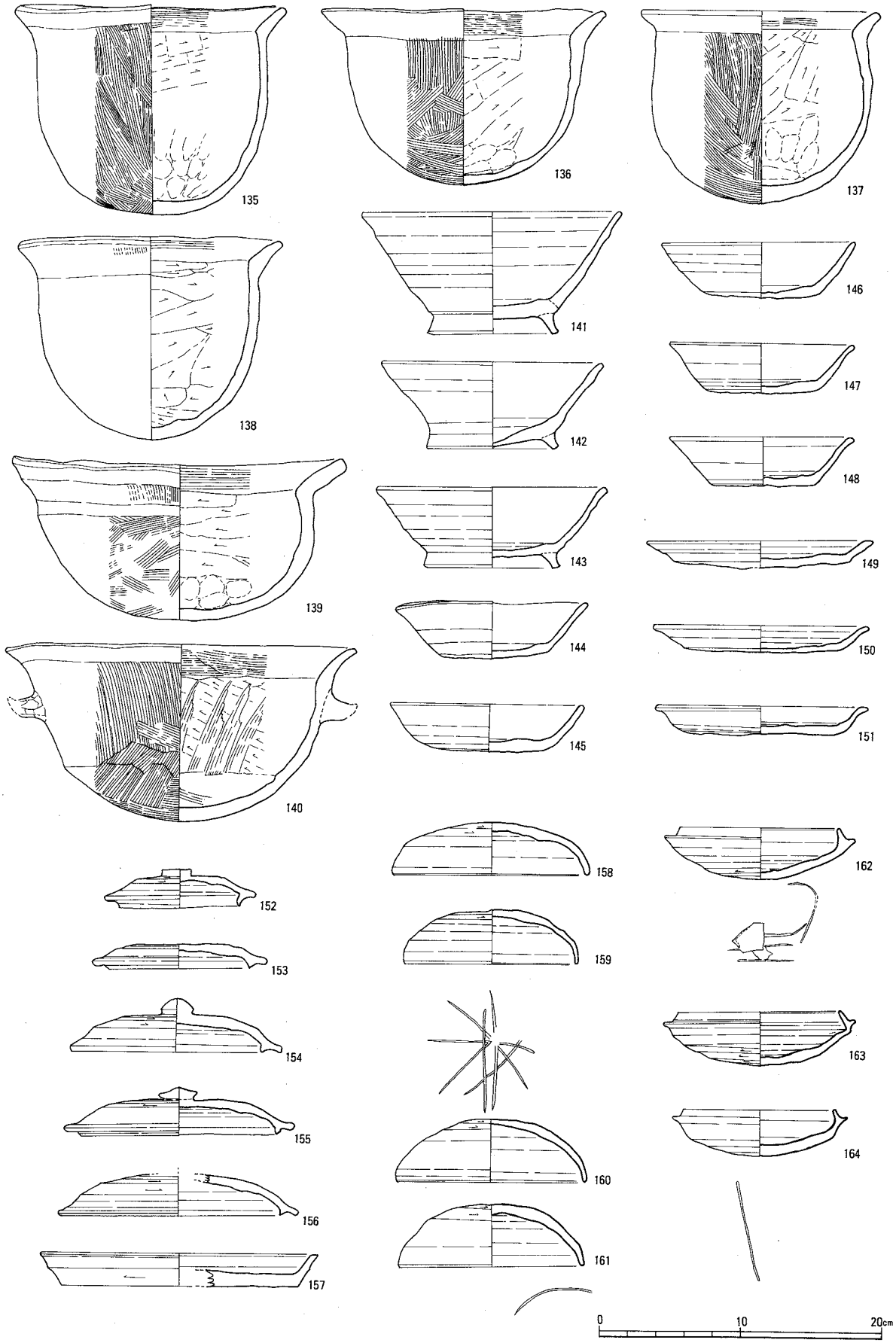


Fig.25　井戸出土遺物実測図(1)(1/4)

SE01：135～151、SE02：152～164

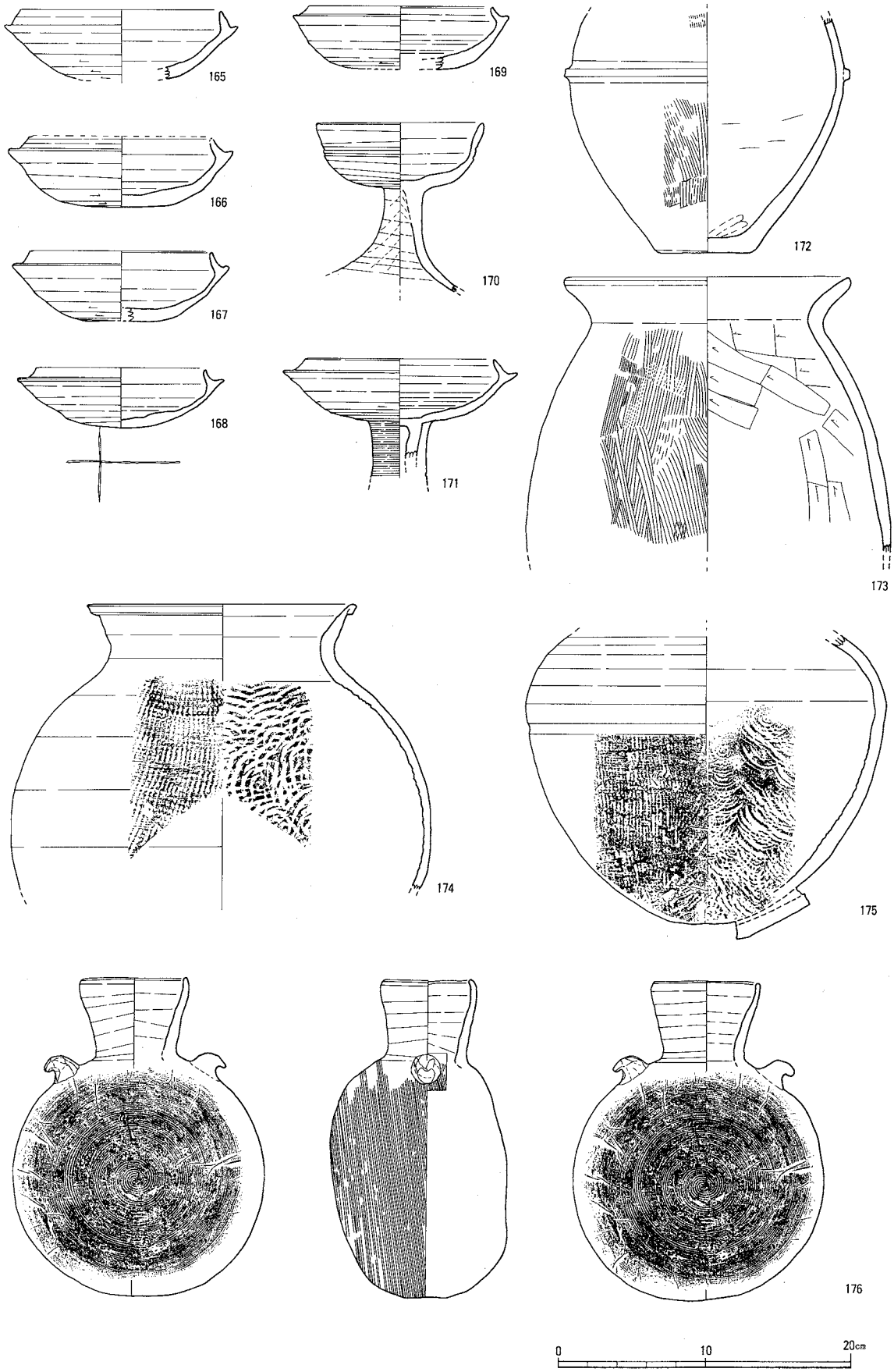


Fig.26　井戸出土遺物実測図(2)(1/4)

SE02：165～176

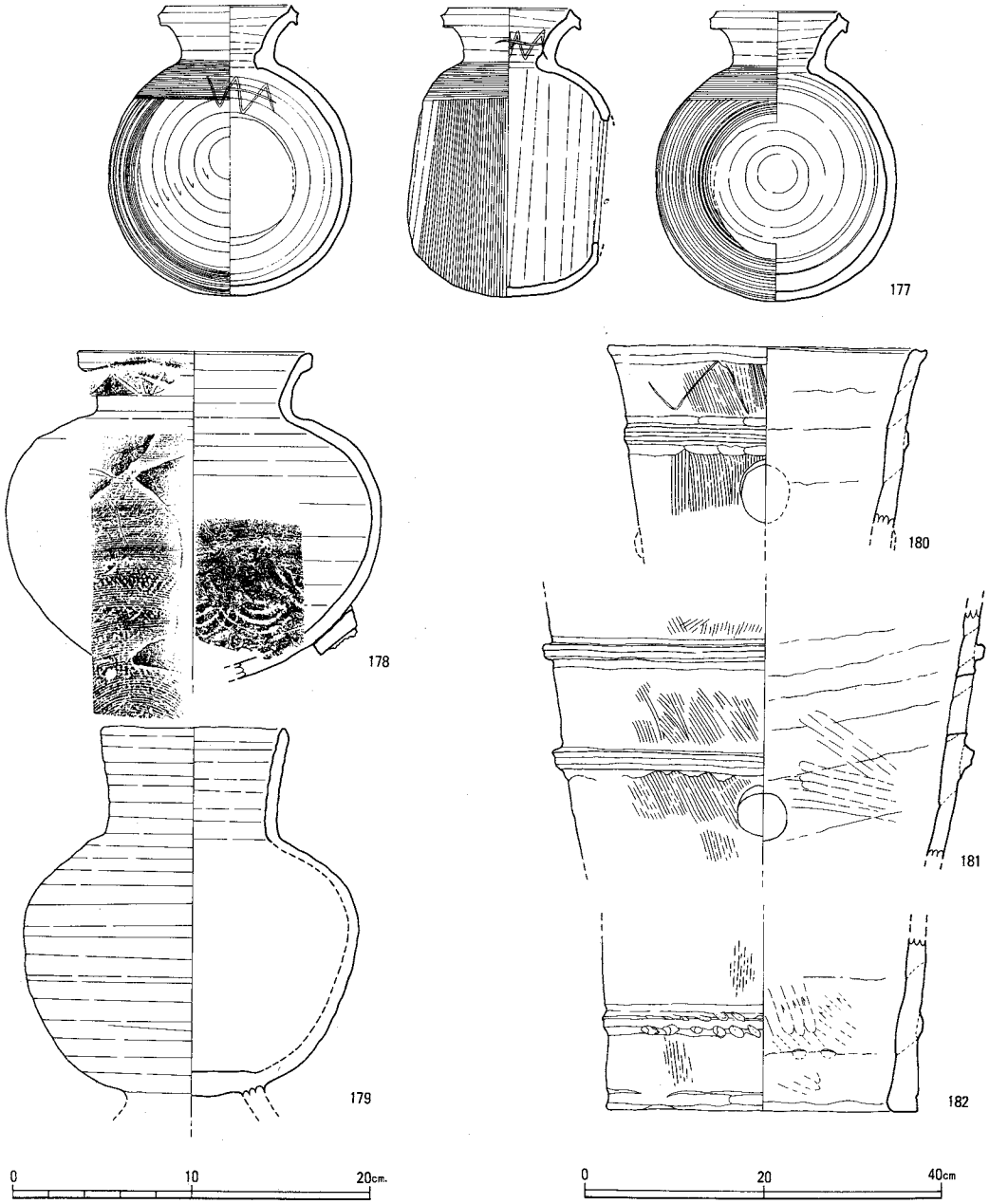


Fig.27　井戸出土遺物実測図(3)(1/4・1/8)
SE02：177～182

5mを測る。東側半分以上は建物の基礎撹乱によって破壊されている。北側の壁は約5cm程抉れている。出土遺物は、須恵IIIbの坏、甕、底面糸切りの土師坏、同安窯系の青磁、玉縁口縁の白磁碗などが出土している。12世紀代に属する中世の井戸と考えられる。曲物などは出土しなかった。

(3)　土坑

SK19（Fig.20）A・B－6区に位置し、SC16内の北西部隅で検出した土坑である。長径0.9m以上、短径0.9m、深さ0.39mを測る。東側は撹乱で一部壊されている。弥生中期前半から後半にかけての遺物が出土している。弥生中期後半に時期に属するものであろう。

SK20（Fig.20）　A－5区で検出した土坑でSC18の北に位置し、SC18を一部切っている。長径1.2

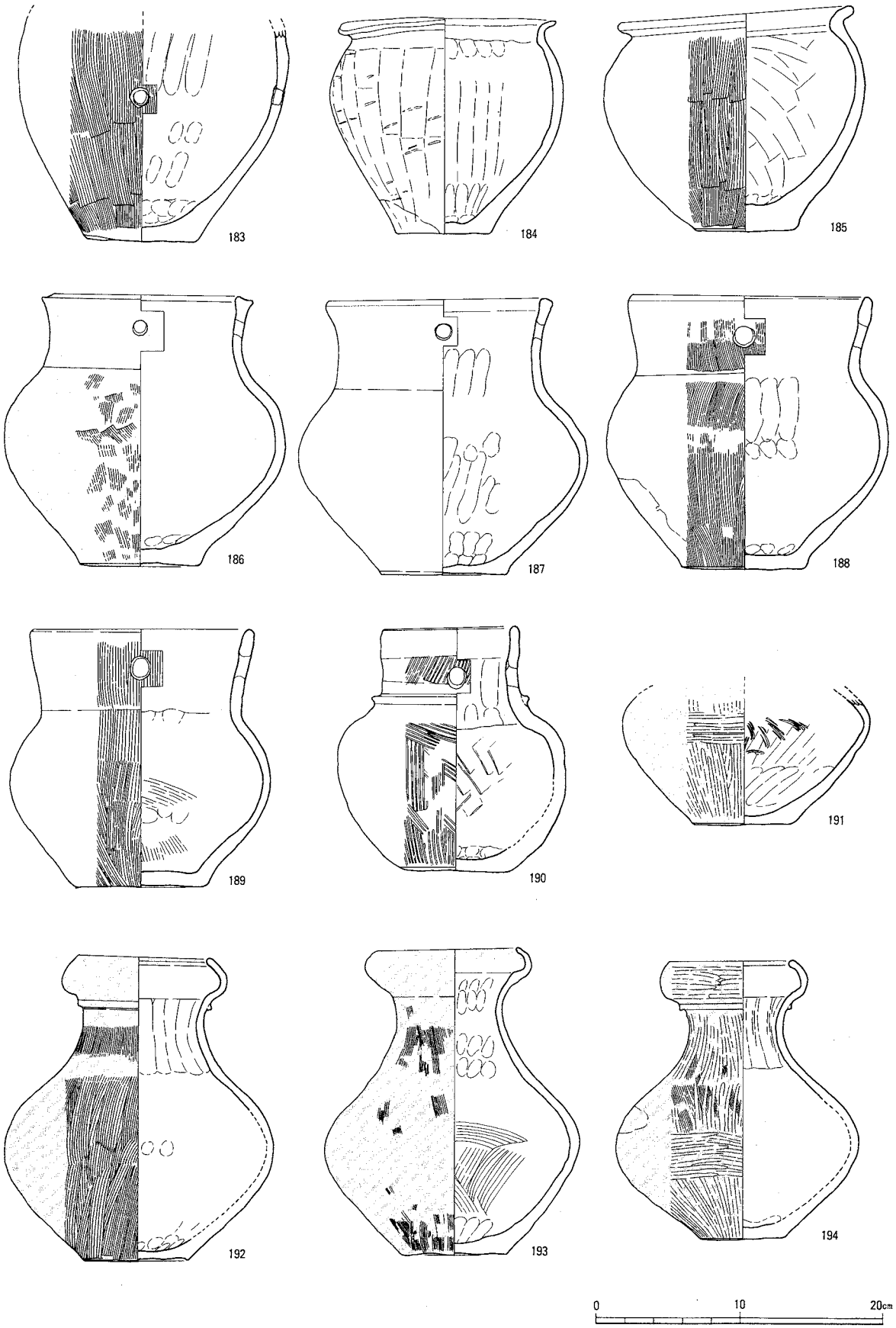


Fig.28　井戸出土遺物実測図(4)(1/4)

SE04：183～194

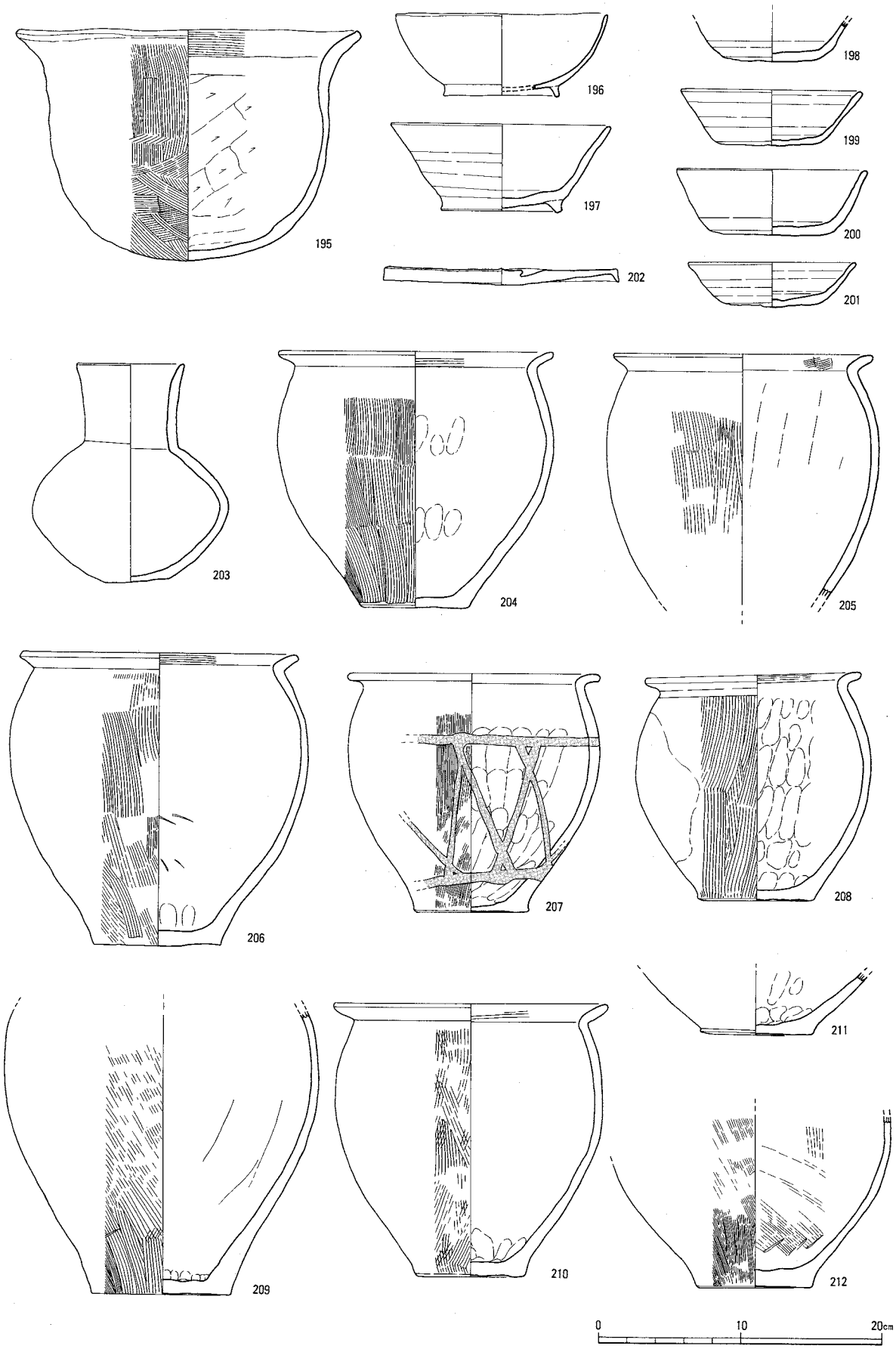


Fig.29　井戸出土遺物実測図(5)(1/4)

SE05：195～202、SE10：203、SE11：204～212

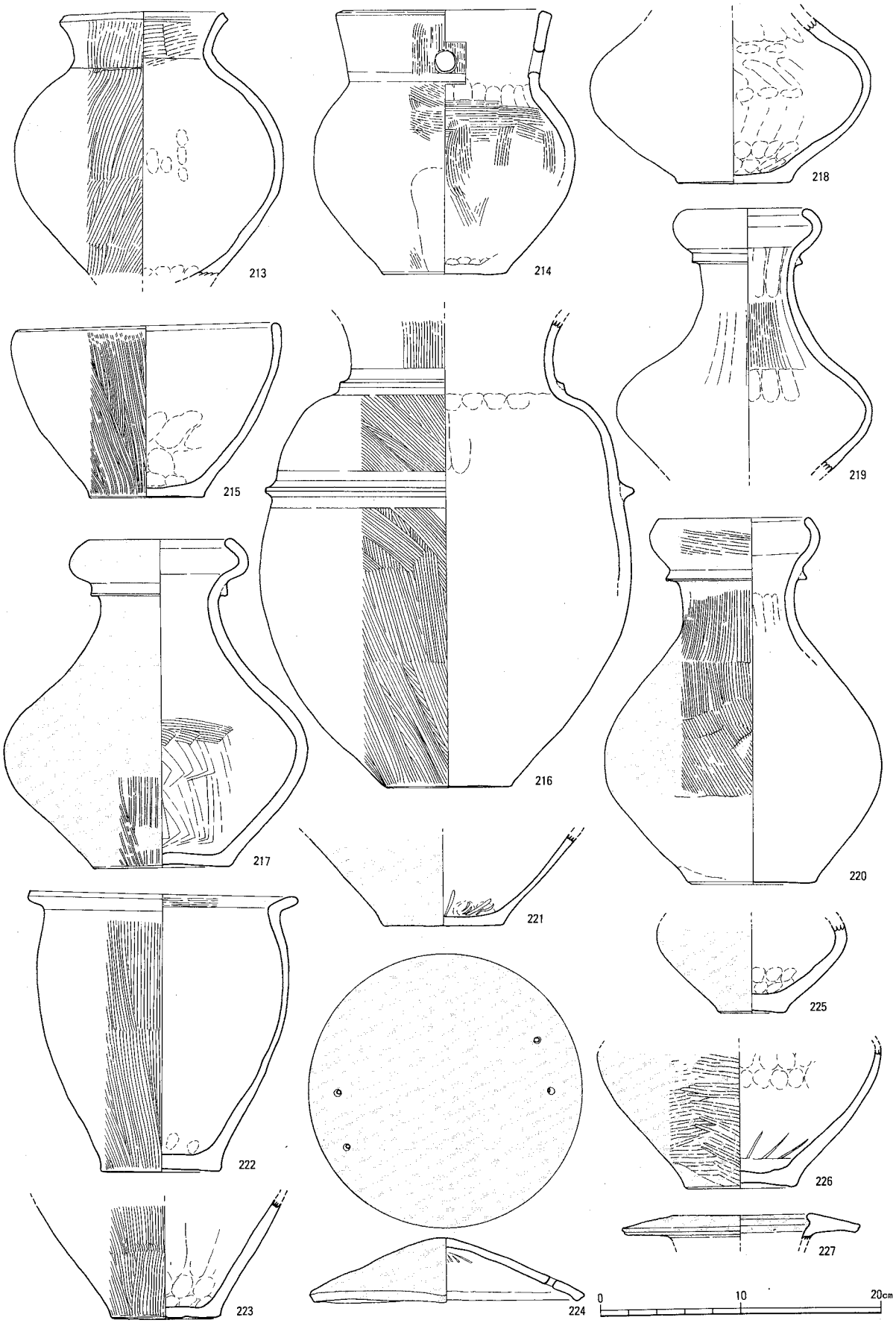


Fig.30　井戸出土遺物実測図(6)(1/4)

SE11：213～220、SE13：221～227

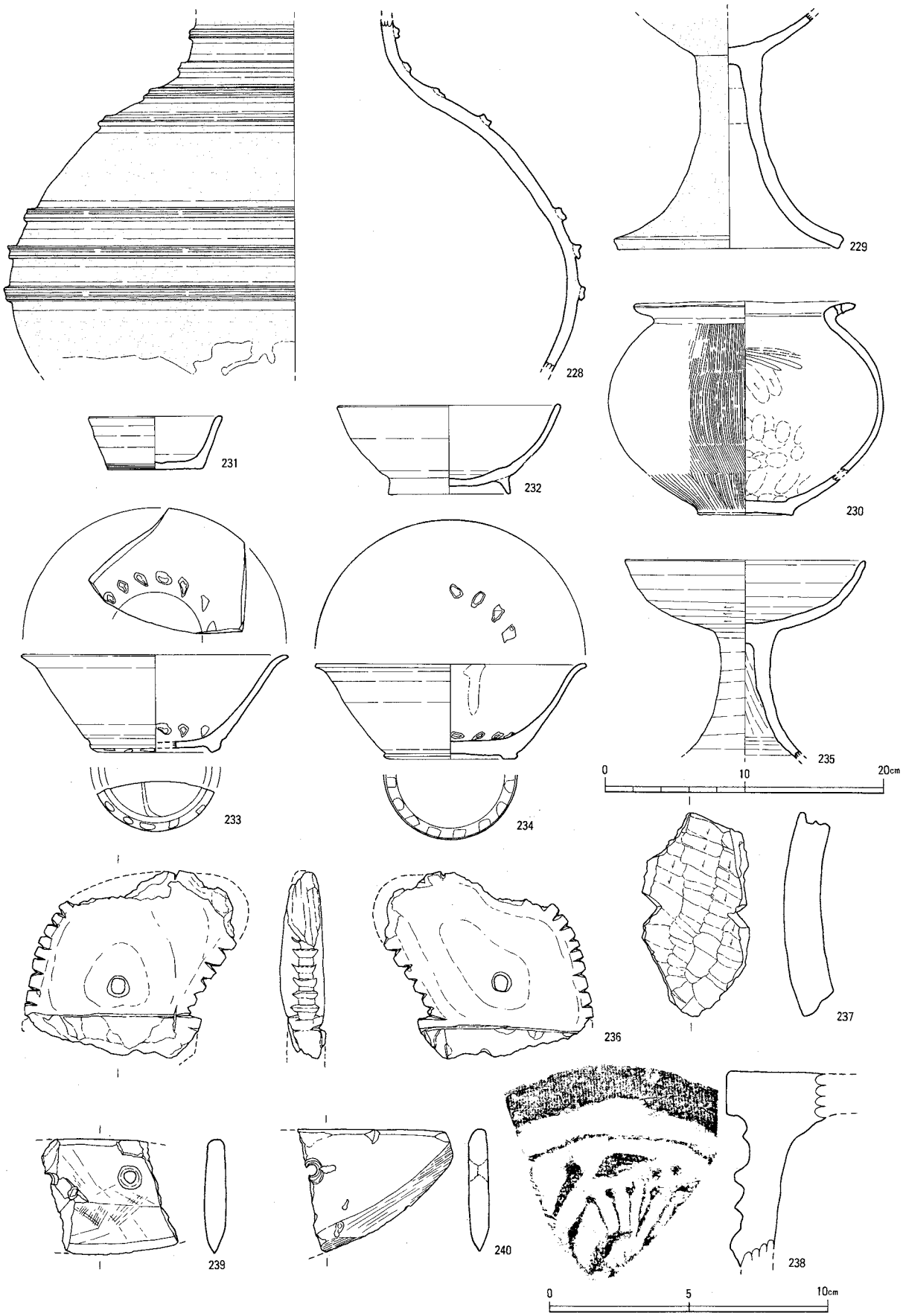


Fig.31　井戸・竪穴住居址・遺構確認時出土遺物実測図(1/2・1/4)

SE13：228～230、SE14：231、SE02：239～240 SC18：325、遺構確認：232・234、包含層：236～238、試掘調査：233

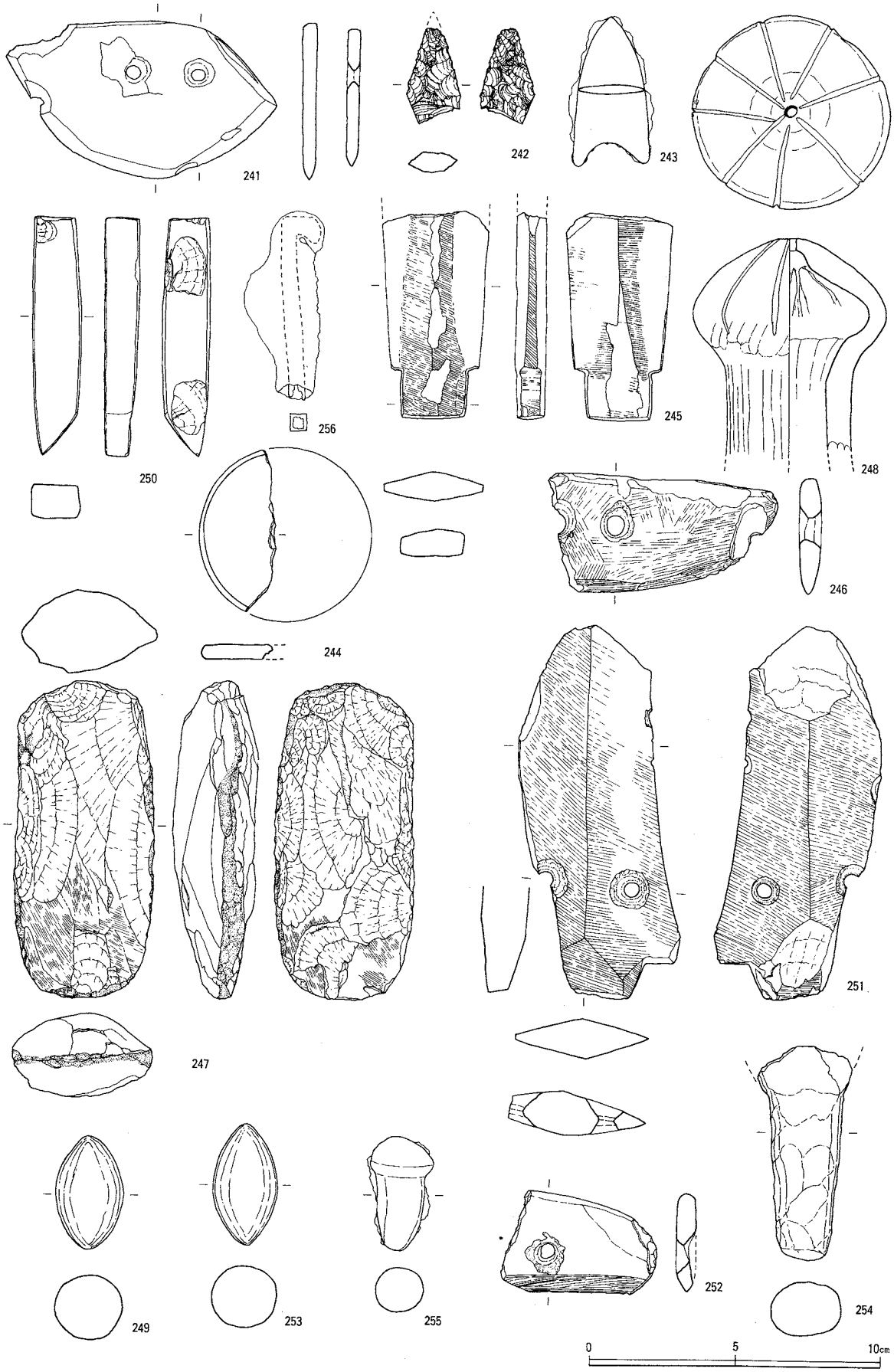


Fig.32　石器・鉄器・土製品実測図(1/2)

SK02：241、SK08：242、SK03：243～249、SK12：250、SD04：251～255

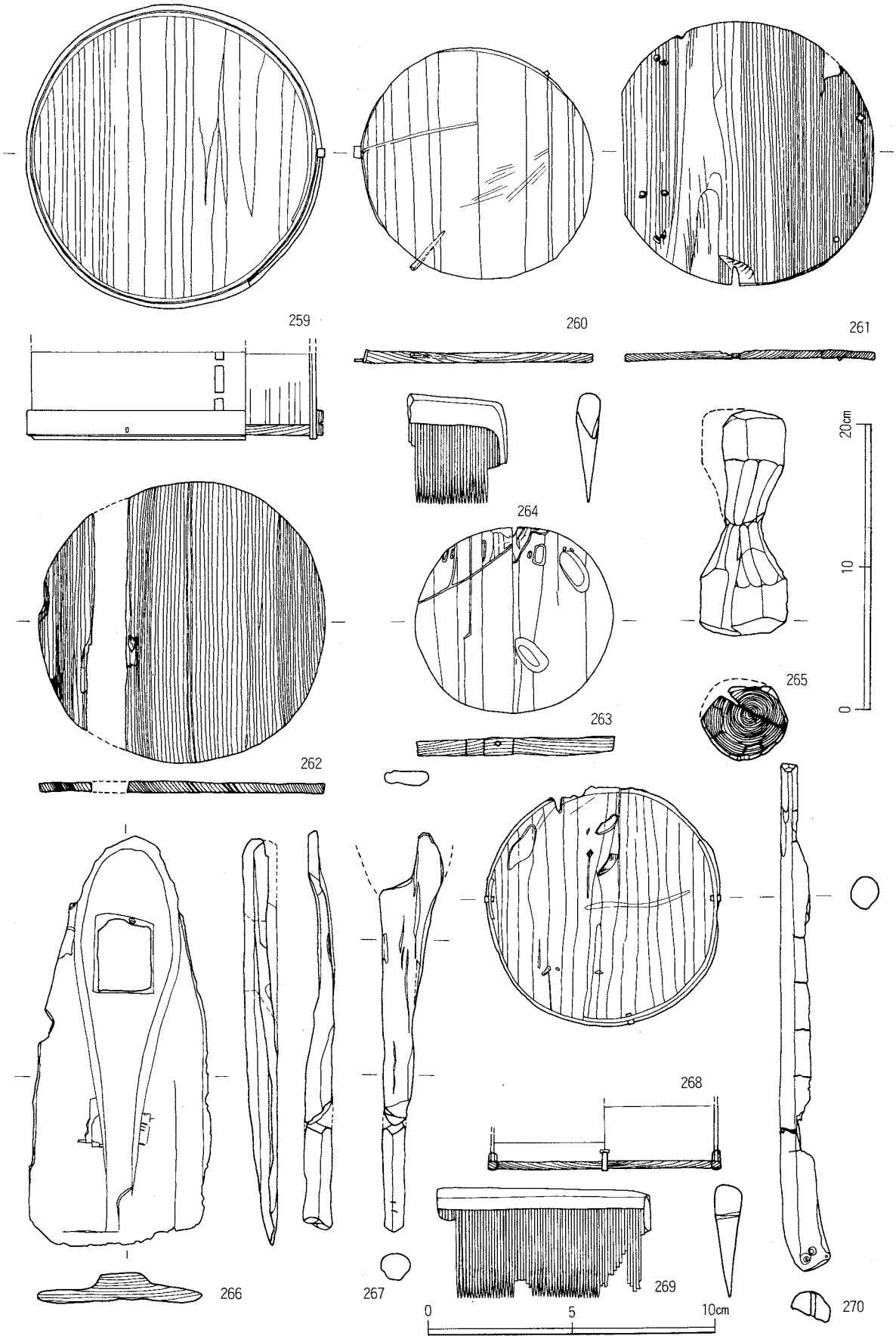


Fig.33　木器実測図(1/2・1/4)

SE01：259～264　SE02：265　SE04：266・267　SE05：268・269　SE06：270

m以上、短径0.95m、深さ0.27mを測る。東側隅部が一段深くなり、さらにここから柱穴状に深くなる。最も深い所は0.63mになる。遺物は須恵器の甕、須恵IIの坏蓋、土師器の甕などが出土している。5世紀末から6世紀初頭頃に位置づけられようか。

SK21（Fig.19）　E－5区で検出した土坑で、残存長0.7m、残存幅1.5m、深さ0.36mを測る。大部分を撹乱によって破壊されているため全体の様子は分らない。弥生中期後半の甕、古式土師器の甕、二重口縁の壺などが出土している。古墳時代初頭のものであろう。

SK22（Fig.19）　D－5区のSE12の北に位置し、SE13を切っている。長さ3.5m以上、幅1.9m、深さ0.15mを測る。南北は撹乱によって破壊されている。弥生後期後半の甕が出土している。時期的にも同時期と考えられよう。

SK24（Fig.19）　C－4区検出の土坑で、残存長1.5m、残存幅0.25m、深さ0.13mのきわめて浅い遺構である。大部分は撹乱によって破壊されており、一部分のみの検出である。本来の規模、形態とも不明である。出土遺物は弥生土器片、土師器片、須恵器甕、坏などである。坏は須恵IVに属するものであろう。古墳時代後期の遺構としておきたい。

(4)　溝

SD23（Fig.19）　C－3区のSE05西側に位置する浅い溝状遺構である。検出長1.8m、幅0.5m、深さ0.3mを測る。溝は西側未調査区へさらに延びる。溝内からは弥生土器片が出土しているが時期の特定はできない。一応弥生時代の遺構として考えておきたい。

SD25（Fig.19）　E－6・7で出土した溝状遺構である。検出長6.5m、幅0.7m、深さ0.14mを測る。弥生中期土器片、須恵器片などが出土しているが埋土の状況などから中世に属する遺構と考えておきたい。出土遺物はごく僅かである。

(5)　包含層・遺構確認

包含層はB区南側で確認された。古い時期の谷地形が伸びてきており、その部分に弥生中期後半から15世紀頃までの遺物を包含している。弥生中期後半代のものは甕、高坏、鋤先状口縁壺、丹塗り筒形器台などがあり、古墳時代のものとしては須恵器坏（IIIa～VII）、甕、高坏、奈良～平安時代では高台付椀、中世では白磁碗、青磁碗などが出土している。青磁碗の中には畳付に鉄銹を塗った明代のものが含まれている。台地部の各時期の生活遺物が多量に流れ込んでおり貴重なものも含まれている。

Fig.31－**232**はB区遺構確認で出土した内黒の土師器椀である。口径15.8cm、底径8.6cm、器高6.4cmを測る。胎土には1～2mm大の石英、長石、赤色粒子を少量含む。内面は灰黒色、外面は淡灰褐色を呈する。**233**は試掘調査時に出土した越州窯青磁碗、**234**は遺構確認時に出土した越州窯青磁碗である。見込み及び畳付に胎土目跡が残る。**233**は復元口径19cm、底径9.2cm、器高6.9cmを測る。内外面ともに灰オリーブの釉を掛ける。**234**は復元口径19.3cm、底径9.5cm、器高6.8cmを測る。2次的な火を受けているため外面は灰緑色、内面は灰黄緑色を呈している。**236**は包含層中層から出土した石製品である。残高6.7cm、残幅7.5cm、厚さ1.6cmを測る。周縁部はV字状に切り込みを入れ加飾している。中央部に径0.5cmの穿孔を施す。円孔下には削り込みで段を有する。灰褐色の滑石製品で、形状から子持勾玉の頭部ではないかと推測している。**237**は包含層出土の石鍋転用石錘である。長さ7.3cm、幅3.8cm、最大厚1.3cmを測る。紐かけは両側からV字状に粗く削り込んでいる。外面には石鍋の削り調整痕がそのまま残っている。**238**は同じく包含層出土の軒丸瓦である。瓦当面には花弁文を施し、圏線が巡る。色調は黒色から灰黒色を呈し、胎土は肌理細かく精良である。

239・240はSE02から出土した石庖丁である。SE02は古墳時代後期の井戸であるが埋土に弥生土器や石器が混入していた。SE02の出土遺物説明の頁で漏らしてしまったので追加で説明しておきたい。**239**

は中層から出土したもので大きく破損しており残長4.9cm、幅4.1cm、最大厚0.75cmを測る。灰色を呈し頁岩か輝緑凝灰岩が素材として使用されている。厚味が強く研磨痕が残っている。240は下層から出土したもので、孔の部分で折損している。残長5.5cm、最大厚0.6cmを測る。やや灰味を帯びた小豆色を呈する輝緑凝灰岩が使用されている。刃部及び体部は横方向の研磨、刃部は使用で少し磨滅し、刃こぼれが認められる。裏面に使用痕があり左手で使用したことが推察される

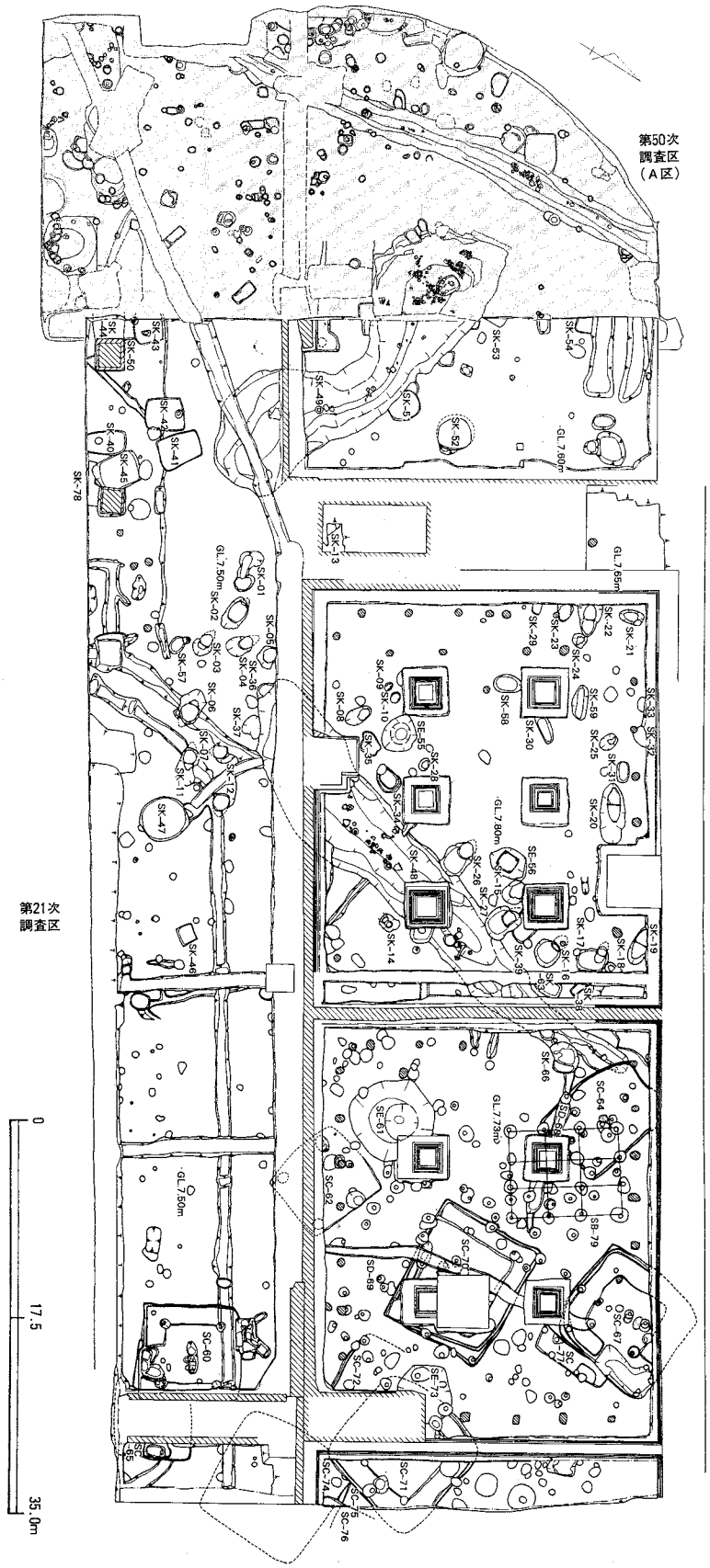


Fig.34　第21次・第50次調査区（A区）接合図（1/350）

Ⅳ おわりに

第50次調査は、これまで調査された第21次調査をはさんで西側隣接地（A区）と東南側近接地（B区）において実施した。調査面積はA区が457㎡、B区が1,758㎡である。A区は調査区が第21次調査区に接続するため当然遺構は連続して検出された。

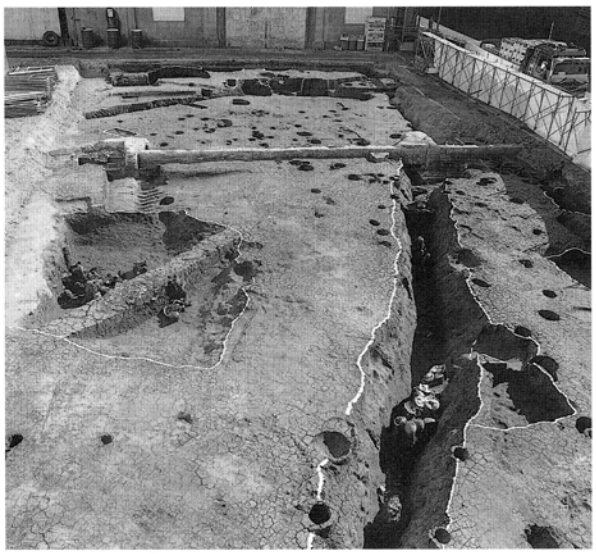
A区で検出された遺構の多くは弥生前期前半代を中心とする貯蔵穴群である。第21次調査区では13基が出土し、南西側に片寄って検出されている。平面プランは方形・長方形を呈するものと円形を呈するものがあった。A区では円形プランの袋状貯蔵穴６基が出土している。分布は第21次調査区で指摘されたとおり調査区南側を中心に分布していた。さらに一群は西側にも広がっている。南側に分布する貯蔵穴群はさらに南側に分布を拡大するものと推察される。那珂遺跡群の西側部分では今回調査した50次調査区が台地の先端部近くにあたり、あと十数mで台地の落ち際になり低湿地部に移行する。B区南側で西側から入る谷の落ち際を確認しているのでかなり広い台地先端部を形成していたと考えられる。那珂・比恵遺跡群ではこの様な台地先端部に４～５箇所それぞれ初期農耕集落が形成されるが、これまで調査してきたビール工場内の集落はその中でも大きな集落と考えられる。SK02の貯蔵穴は直径３ｍを測る大型のものであり、今後調査が拡大すれば貯蔵穴の数もさらに増大するものと考えられる。これらの初期農耕集落は発展して中期へ引き継がれる場合が多い。

A区では前期前半の土壙墓が２基、中期前半の甕棺墓が１基検出されている。墓の出土は少なかったが、第21次調査では中期前半から後期初頭にかけての甕棺墓28基、土壙墓６基、甕棺墓墓壙８基が出土している。今回の調査では前期の土壙墓が出土しており、甕棺墓葬成立以前は散発的ではあるが土壙墓が作られていることが明らかになった。墓地に関連する遺構としては他にSK03がある。祭祀土坑で、第21次調査のSK49の延長である。第21次調査ではSK48という祭祀土坑があり、筒形器台を中心に墓地祭祀に関係する祭祀土器が多量に出土している。SK49は48に直交して作られたもので、これらの溝状の土坑によって甕棺墓群が方形に区画されると考えられている。SK03は調査区内で終焉してしまうのでSK48と同様な溝状の土坑になるが、祭祀土器群の組み合せはSK48とは異なっている。SK03（SK49）付近には甕棺墓群は広がらないので祭祀行為の内容が異なっていたと考えられよう。SK03の外側に１基中期前半の甕棺墓が出土しているが群としてはまとまらない。

第21次調査では弥生時代終末期から古墳時代前半期にかけての竪穴住居址が13軒出土している。今回の調査では古墳時代初頭の溝を検出した。南西から北東方向にやや弧を描きながら伸びている。溝の断面からみれば単なる区画溝ではなくある程度防禦機能を持った溝と考えることができる。溝の作られた位置が台地縁辺部であることも注意が必要である。第21次調査で出土した集落と時期的に重なる部分があり、この溝と集落とは一体のものであったと考えられよう。つまり、集落の西側を限る防禦性の高い溝と考えることができ、台地縁辺に添って伸びているものと推察される。

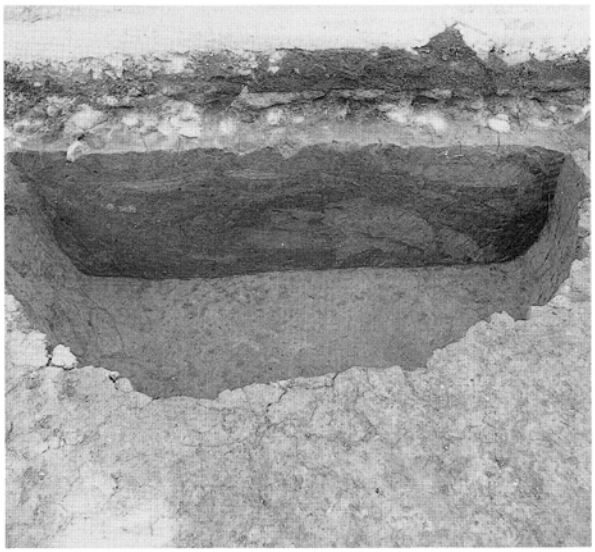
B区では削平が激しく、井戸と一部の遺構しか検出できなかったが、各時期のものがあり、遺跡の内容の濃さを示している。井戸は弥生中期末から後期まであり、中期から後期の集落が存在したことが分かる。SE04からは福岡平野より東側からもたらされたと考えられる平鍬が出土している。井戸は古墳時代後期の大型井戸がある。近くに前方後円墳があり、関係する集落も存在したと考えられる。古代から中世の井戸もあり、連続して集落が営まれていたことが分かる。掘立柱の柱穴群が分布している所から越州窯青磁碗が出土しており、平安時代に建物群が存在した可能性がある。各時期を通じて貴重な遺構・遺物が発見され、那珂遺跡の重要性がさらに増加したと考えることができよう。

PLATE



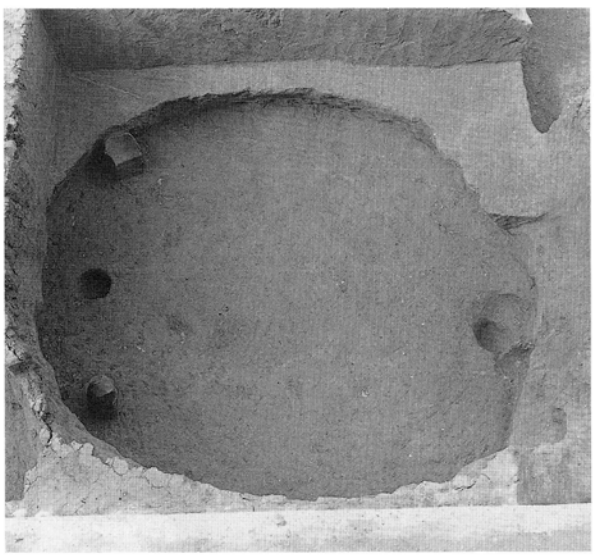
(1) A地区調査区全景（北から）

(2) 貯蔵穴群出土状況（北から）



(3) SK01出土状況（北から）

(4) SD02土層堆積状況（北から）

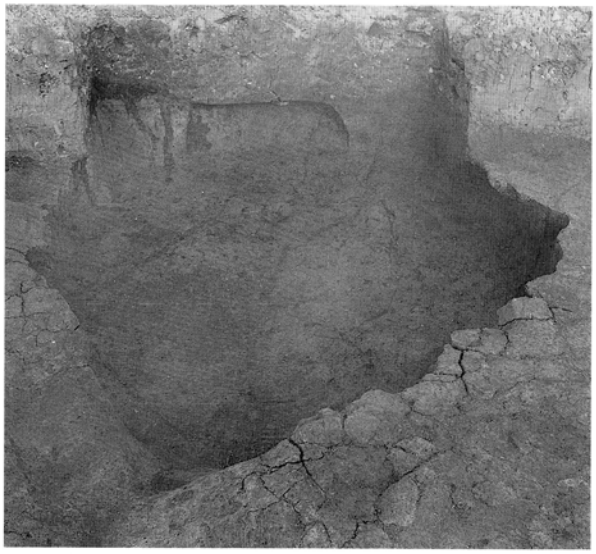


(5) SK02出土状況（南から）

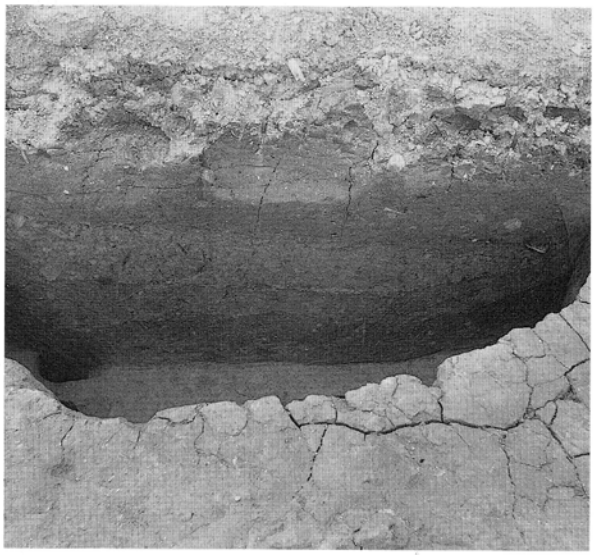
(6) SK08出土状況（北から）

PL.2

(1) SK10土層堆積状況（北から）

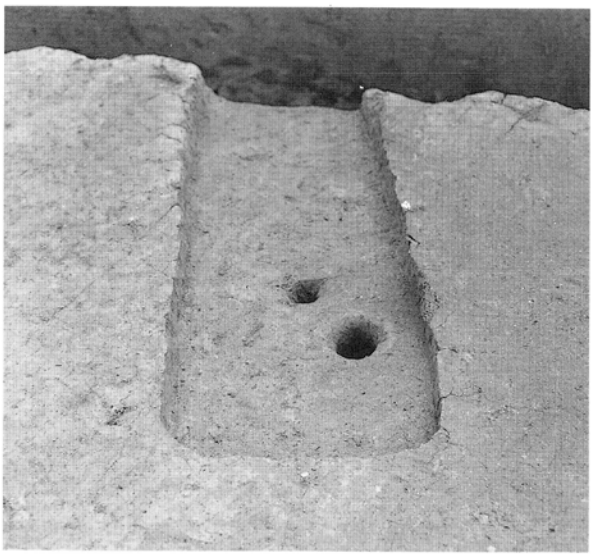


(2) SK11出土状況（東から）



(3) SK12土層堆積状況（東から）

(4) SK14出土状況（東から）

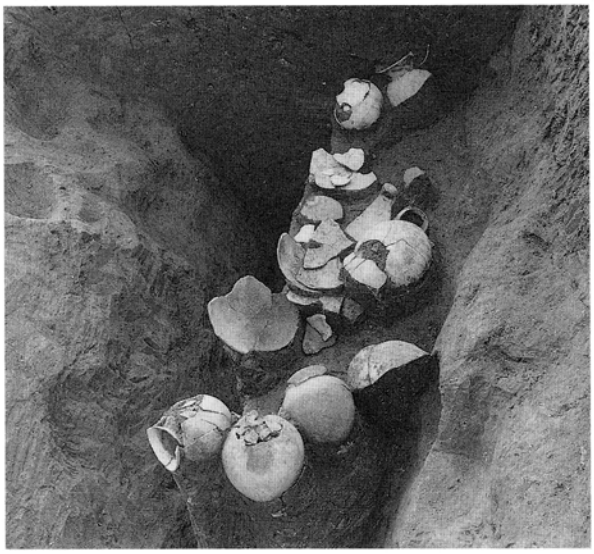


(5) SK05出土状況（北西から）

(6) SK06出土状況（北西から）

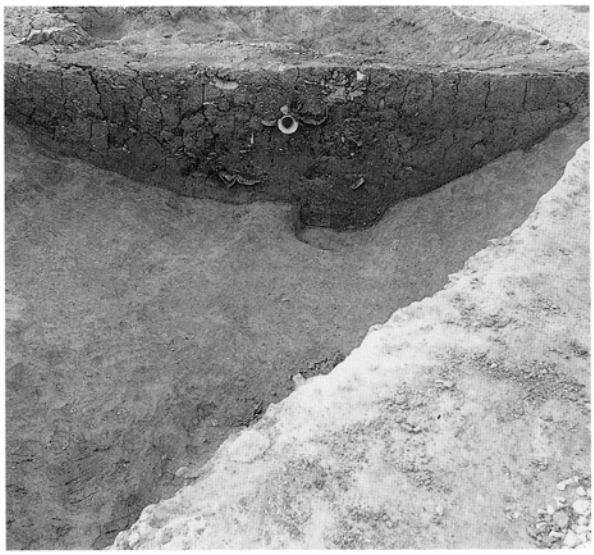
(1) SK09出土状況（西から）

(2) SD04出土状況（北から）



(3) SD04Ⅰ区遺物出土状況（北から）

(4) SK03上層遺物出土状況（西から）



(5) SK03土層堆積状況（東から）

(6) SK03中層遺物出土状況（北から）

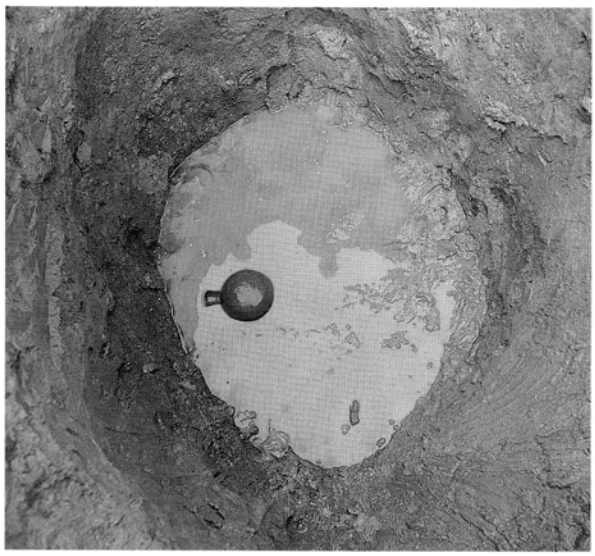
(1) B地区調査区西半部全景（南から）

(2) SC16・17・18他出土状況（東から）

(3) SC18炉址出土状況（東から）

(4) SE01出土状況（北から）

(5) SE02出土状況（南から）



(6) SE02下部遺物出土状況（東から）

(1) SE03出土状況（東から）

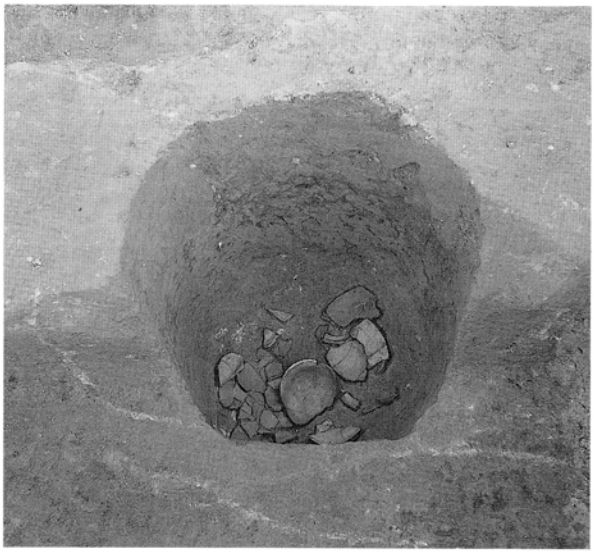
(2) SE04出土状況（西から）

(3) SE04遺物出土状況（下層上部）（西から）

(4) SE04遺物出土状況（下層下部）（南から）

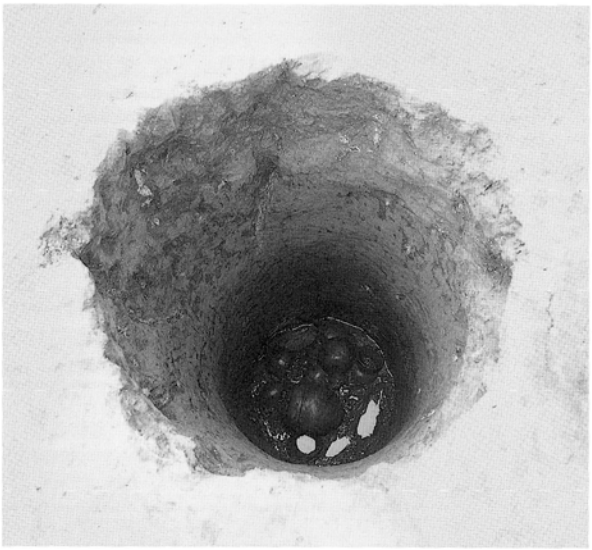
(5) SE05出土状況（北から）

(6) SE07出土状況（東から）



(1) SE08出土状況（北から）

(2) SE10出土状況（南から）

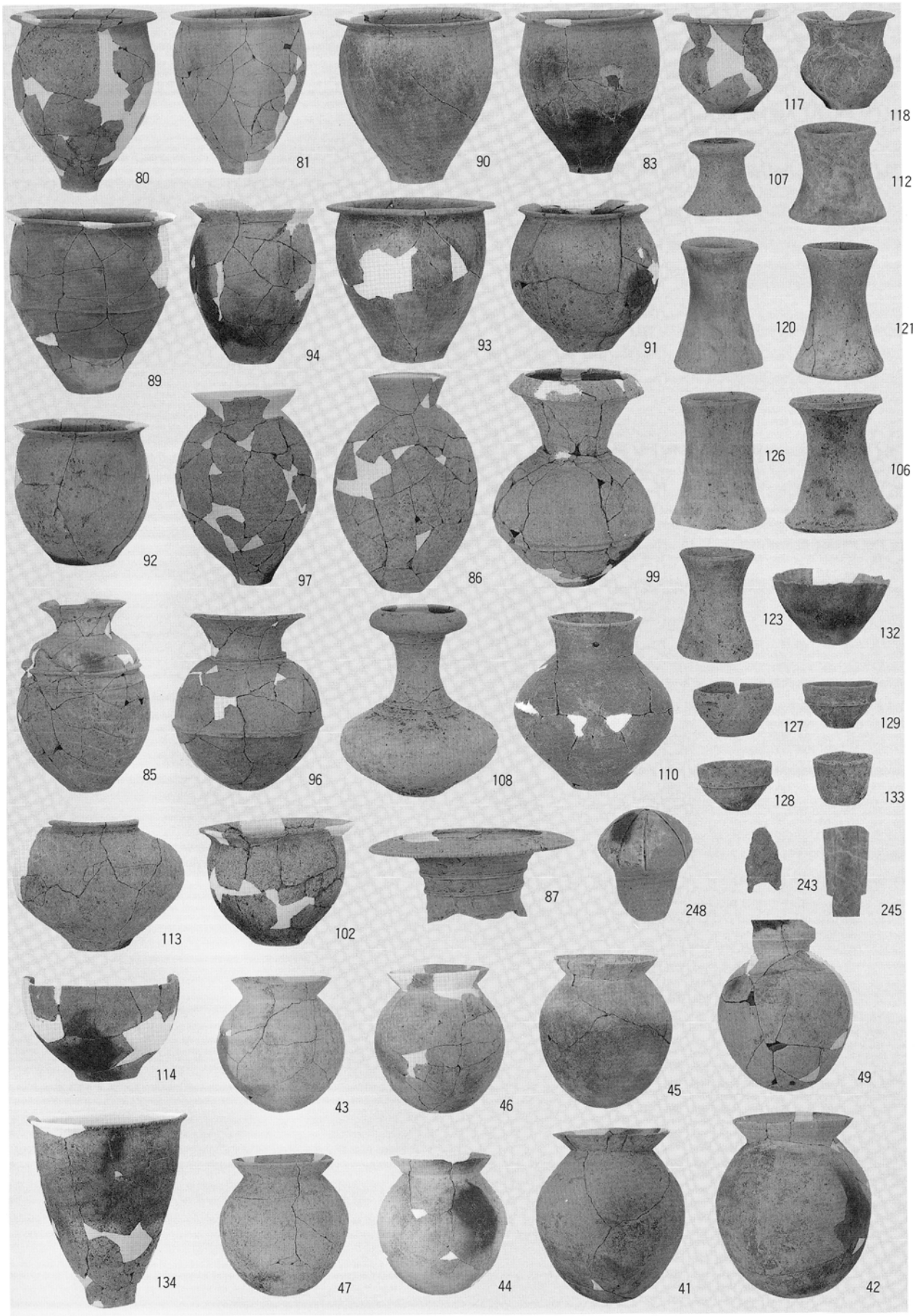


(3) SE11出土状況（東から）

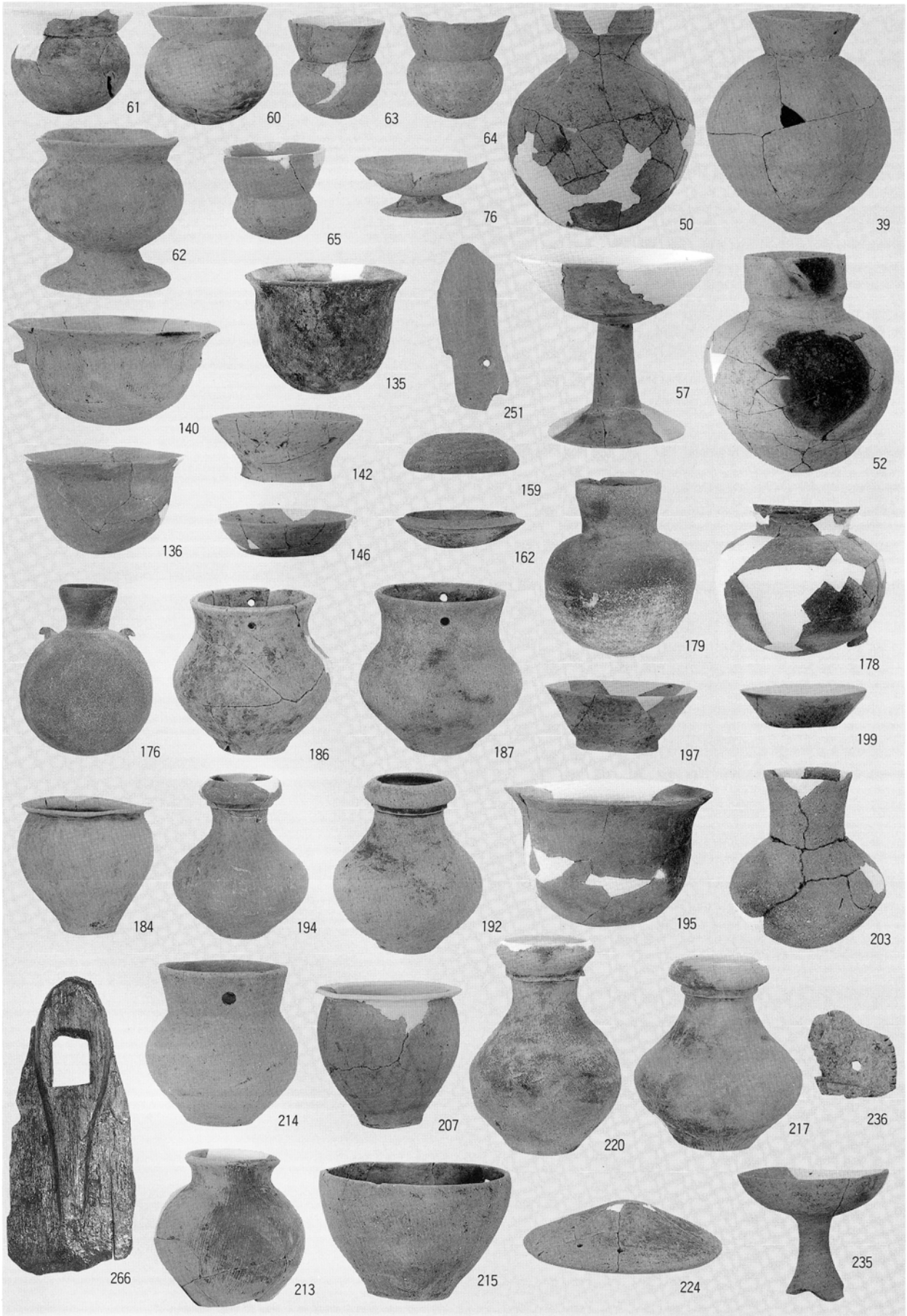
(4) SE11遺物出土状況（東から）

(5) SE13出土状況（北から）

(6) SE14出土状況（東から）


80
81
90
83
117
118
107
112
89
94
93
91
120
121
92
97
86
99
126
106
85
96
108
110
123
132
127
129
128
133
113
102
87
248
243
245
114
43
46
45
49
134
47
44
41
42

出土遺物 (1)


61
60
63
64
50
39
62
65
76
135
251
57
52
140
142
159
136
146
162
179
178
176
186
187
197
199
184
194
192
195
203
214
207
220
217
236
266
213
215
224
235

出土遺物 (2)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第518集

那　珂　18

－那珂遺跡群第50次発掘調査の報告－

1997年（平成９年）３月31日

発　　行　　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目８－１
(092) 711－4667

印　　刷　　金丸印刷株式会社
福岡市東区箱崎ふ頭６丁目46の１号
(092) 621－4257